ISSN 2188 - 1863

愛知医療学院短期大学紀要

第14号

Bulletin of Aichi Medical College

目　　次

[原著]

整形外科的疾患患者への徒手刺激による介入が疼痛・自律神経活動・情動に及ぼす影響　……　3
藤本　大介，胡　愛玲，山口　琢児，鳥居　昭久，小林　弘幸

作業療法の一部を経験することでどのような技能や態度を修得できるのか
―作業療法学生のフォーカスグループインタビューによる分析―　……　12
清水　一輝，加藤　真夕美，外倉　由之

障がいを有する高齢者における世代間交流の有用性
―学生と子どもとの関わりに関する質的分析―　……　21
濵田　光佑，三浦　明子，寺村　晃

[短報]

「清須市民げんき大学」のレクリエーション演習が参加高齢者に及ぼす影響
―KH Coder を用いたアンケート解析―　……　33
外倉　由之，加藤　真夕美，清水　一輝

[活動報告等]

高齢者大学の卒業生が社会で活躍する場を広げる支援の試み　……　45
加藤　真夕美，清水　一輝，外倉　由之

[学生研究]

卒業研究論文　第 13 巻　令和四年度　……　57

[投稿規定]

愛知医療学院短期大学紀要投稿規定　……　62

[原著]

整形外科的疾患患者への徒手刺激による介入が疼痛・自律神経活動・情動に及ぼす影響

藤本　大介 [1)]　胡　愛玲 [2)]　山口　琢児 [2)]　鳥居　昭久 [3)]　小林　弘幸 [4)]

1)愛知医療学院短期大学　リハビリテーション学科　理学療法学専攻
2)順天堂大学大学院　医学研究科　漢方先端臨床医学
3)東京保健医療専門職大学　リハビリテーション学部　理学療法学科
4)順天堂大学大学院　医学研究科　病院管理学

Effects of manual stimulation on pain, autonomic nerves activity and emotion in patients with orthopedic diseases

Fujimoto Daisuke　Hu Ailing　Yamaguchi Takuji　Torii Akihisa
Kobayashi Hiroyuki

【要旨】

身体に疼痛を抱えることで個々の社会的な役割を損なう場合もあり，その対応に徒手療法がある．本研究の目的は，徒手刺激に伴い疼痛が軽減する機序を明らかにすることである．疼痛を主訴とする 27 名の整形外科的疾患患者を徒手刺激を行う群（介入群，ｎ＝13 名）と安静臥位で過ごす群（ｎ＝14 名）に割り付けるランダム化比較試験を行った．徒手刺激は，身体機能評価に基づき体幹・骨盤関節に実施した．評価項目は，交感神経・副交感神経活動，疼痛評価，情動評価，唾液アミラーゼ濃度・コルチゾル濃度であった．介入群は，疼痛の減弱（P＜0.05），交感神経活動の抑制（P＜0.05），情動の改善（P＜0.01），唾液アミラーゼ・コルチゾル分泌の抑制（P＜0.05）が有意に認められた．徒手刺激に伴う体性‐自律神経反射の発現は，情動の変容とともに徒手刺激により疼痛が軽減する機序を検討する一助となり得ると考えられた．

キーワード：自律神経　徒手　疼痛　情動

【はじめに】

身体に疼痛を抱えることで個々の社会的な役割を損なう場合がある．運動器慢性疼痛患者の 10％が就学，就労の制限を余儀なくされ，その社会的損失が 3700 億円に上ると言われている [1)]．

疼痛とは，感覚的側面，情動的側面，認知的側面からなる多面的な病態である [2)]．疼痛の惹起に付随して自律神経系の反応も生じ，血管収縮，組織の虚血が起こり，そして酸素不足に陥った組織からは発痛物質が生成され，それらがまた知覚神経を刺激することにより，疼痛の増強が起こると考えられている [3)]．

疼痛への対応として理学療法があり，各種手段の中で，エビデンスは低いとされているものの徒手療法がある [4)]．徒手療法の効果の一つに自律神経活動に及ぼす影響が言及され

ている[5]．しかしながら，報告されている先行研究の結果にばらつきがあり，徒手刺激が自律神経活動にどのように応答し，疼痛が軽減されているのか，明らかとは言えない．

【目的】

本研究の目的は，整形外科的疾患に罹患した患者への徒手刺激による介入が疼痛，自律神経活動，情動に及ぼす影響を検討し，徒手刺激に伴い疼痛が軽減する機序を明らかにすることである．

【対象】

外来の整形外科クリニックに疼痛を主訴として来院し，医師よりリハビリテーションの処方を受けた患者のうち，本研究の目的，方法等を説明し同意した 27 名を対象とし，約 20 分間，体幹・骨盤関節への徒手刺激を行う群（介入群）と約 20 分間ベッド上にて安静にする群（対照群）に割り付けた（表 1）．対象を割り付ける際，コンピュータ乱数による乱数表を用いてランダム化を図った．

除外基準は，内服薬服用者，手術の既往がある症例，原因が明らかな急性発症例，炎症所見を伴う症例，循環器疾患，神経疾患，線維筋痛症，痛風，不安定な喘息，癌といった内科的疾患，全身的な関節炎に罹患している症例とした．

なお，本研究は愛知医療学院短期大学倫理審査委員会の承認を得て実施した（承認番号：第 17039 番）．

表 1　対象の属性

	介入群	対照群	p 値
年齢（歳）	47.7±5.5	43.0±14.5	0.42
罹病期間（日）	291.6±554.9	209.7±330.7	0.64
性別	女性：13名	男性：3名 女性：11名	
主訴	膝痛　5名 腰痛　5名 頸部痛　2名 下肢痛　1名	膝痛　6名 肩痛　3名 腰痛　3名 頸部痛　2名	
診断名	変形性膝関節症　5名 変形性腰椎症　3名 腰部椎間板症　2名 変形性頸椎症　2名 腰部脊柱管狭窄症　1名 ジャンパー膝　1名	変形性膝関節症　3名 腰部椎間板症　2名 肩関節周囲炎　2名 膝半月板損傷　2名 ジャンパー膝　1名 変形性頸椎症　1名 頸部椎間板症　1名	

【方法】

1．実験環境

外部の音や光，気温，湿度，臭いの研究環境条件を統制することが可能である整形外科

クリニック内のリハビリテーション室にて実施した．

2．測定項目と使用機器

1）自律神経検査

加速度脈波測定装置（パルスアナライザープラスビュー，YKC 社製）を指尖部に装着し，加速度脈波を測定することで自律神経活動を評価した．加速度脈波を用いて，R-R 間隔を求めた後，R-R 間隔を時系列データに変換した．時系列データを高速フーリエ変換し，心拍変動中に含まれる周期成分の周波数とその強さ（パワー）を算出した．得られたパワースペクトルから，低周波成分（LF：0.03～0.15Hz）と高周波成分（HF：0.15～0.5Hz）を定量化した．測定値の検討には，LF，HF の対数である LF Ln，HF Ln を用いた．LF Ln は交感神経活動，HF Ln は副交感神経活動を示すことが知られている [6]．

2）疼痛評価

疼痛強度の主観的評価は，視覚的アナログスケール（VAS）および短縮版マクギル疼痛質問票（SF-MPQ）[7]を用いた．VAS は，先行研究 [7]に倣い 10cm の直線で表し，直線の左端は「疼痛なし」で，右端は「感じうる最もひどい疼痛」とし，対象者にはその時点において自分の知覚している疼痛の程度を示すと思う場所に，直線を横切る 1 本の線を引くように伝えた．そして，対象者が引いた線を mm 単位で数量化し，分析に用いた．SF-MPQ は，感覚 11 項目，感情 4 項目からなり，各項目には 4 つのランク付けがされ，各々の合計点を求める．SF-MPQ は信頼性と妥当性に関する報告がなされており，臨床で広く用いられている [7]．

3）情動の評価

情動の評価は，Profile of mood states second edition 日本語短縮版・総合的気分状態スコア（POMS2）[8]を用いた．POMS2 は，「怒り–敵意」，「混乱–当惑」，「抑うつ–落ち込み」，「疲労–無気力」，「緊張–不安」，「活気–活力」，「友好」の 7 尺度から算出され，世界的に信頼されている検査法である [8]．

4）唾液分析

唾液アミラーゼ濃度は唾液アミラーゼモニター（ニプロ社製）[9]を用いて測定した．専用チップを舌下部に約 30 秒挿入して少量の唾液検体（約 30μl）を採取した後，分析機本体に専用チップを挿入し分析した．

唾液コルチゾル濃度は，唾液試料採取用器具（サリメトリックス社製 SalivaCollectionAid）を用いて唾液を採取し，範囲拡張型唾液コルチゾル酵素免疫検定法により測定した．

3．測定プロトコル

介入を行う 30 分前から座位にて VAS，SF-MPQ，POMS2，唾液の採取を行い，残り時間は安静を保ち，30 分経過した後，背臥位にて自律神経検査を実施した．その後，介入群は約 20 分間，体幹・骨盤関節への徒手刺激を行い，対照群は約 20 分間ベッド上にて安静にした．介入群，対照群ともに介入が終了した直後，再び座位にて VAS, SF-MPQ, POMS2, 唾液の採取を行い，背臥位にて自律神経検査を行った．

4．体幹・骨盤関節への徒手刺激

徒手刺激は，対象の身体機能の評価結果に基づき，全例，著者が Spine Dynamics 療法[10]の理論に則り実施した．具体的には，脇元[5]の報告に倣い，仙腸関節，椎間関節，肋椎関節，胸肋関節を対象関節とし，体幹，四肢の筋スパズム（反射性筋攣縮）の改善を図り，体幹，四肢の関節適合性を向上させる治療を実施した．

5．統計処理

統計処理には，SPSS を用いた．LF Ln，HF Ln，VAS，唾液アミラーゼ濃度，唾液コルチゾル濃度の介入群と対照群の群間比較は，独立 2 群の t 検定を用いた．SF-MPQ，POMS2 の介入群と対照群の群間比較は，マン・ホイットニーの U 検定を用いた．また，LF Ln，HF Ln，VAS，唾液アミラーゼ濃度，唾液コルチゾル濃度の介入群と対照群の介入前，介入後での群間比較は，対応のある t 検定を用いた．SF-MPQ，POMS2 の介入群と対照群の介入前，介入後での群間比較は，ウィルコクソンの符号付順位和検定を用いた．統計処理は，いずれも有意水準を 5%未満とした．

【結果】

介入前の対象者の疼痛評価（VAS，SF-MPQ），自律神経活動（LF Ln，HF Ln），情動評価（POMS2），唾液アミラーゼ濃度，唾液コルチゾル濃度は，介入群と対照群で有意な差が認められなかった（表 2）．

表 2　介入前の対象者特性

	介入群	対照群	p値
VAS(mm)	36.0±14.7	38.7±14.5	0.67
SF-MPQ	5.8±4.9	8.2±6.9	0.40
LF Ln	5.3±1.1	5.0±1.1	0.52
HF Ln	4.7±1.3	4.7±1.1	0.86
POMS2	19.1±18.8	19.9±19.2	0.94
唾液アミラーゼ濃度(U/ml)	21.8±16.0	20.4±16.0	0.85
唾液コルチゾル濃度(μg/dl)	0.17±0.13	0.17±0.08	0.90

疼痛評価のうち，VAS は介入群の介入後が 19.5±14.0mm で，介入前の 36.0±14.7mm と比較して介入後で有意に低値を示した（$p < 0.01$）（図 1）．一方，対照群の介入後は 38.7±14.1mm，介入前は 38.7±14.5mm であり，介入前後で有意な差は認められなかった．SF-MPQ は介入群の介入後が 2.4±2.2 で，介入前の 5.8±4.9 と比較して介入後で有意に低値を示した（$p < 0.01$）（図 2）．一方，対照群の介入後は 7.9±7.3，介入前は 8.2±6.9 であり，介入前後で有意な差は認められなかった．

自律神経活動レベルのうち，LF Ln は介入群の介入後が 4.6±1.2 で，介入前の 5.3±1.1 と比較して介入後で有意に低値を示した（$p < 0.05$）（図 3）．一方，対照群の介入後は 4.9±1.1，

介入前は 5.0±1.1 であり，介入前後で有意な差は認められなかった．HF Ln は，介入群の介入後が 4.6±0.7，介入前は 4.7±1.3 であり，介入前後で有意な差は認められなかった（図4）．同様に，対照群の介入後は 4.8±0.9，介入前は 4.7±1.1 であり，介入前後で有意な差は認められなかった．

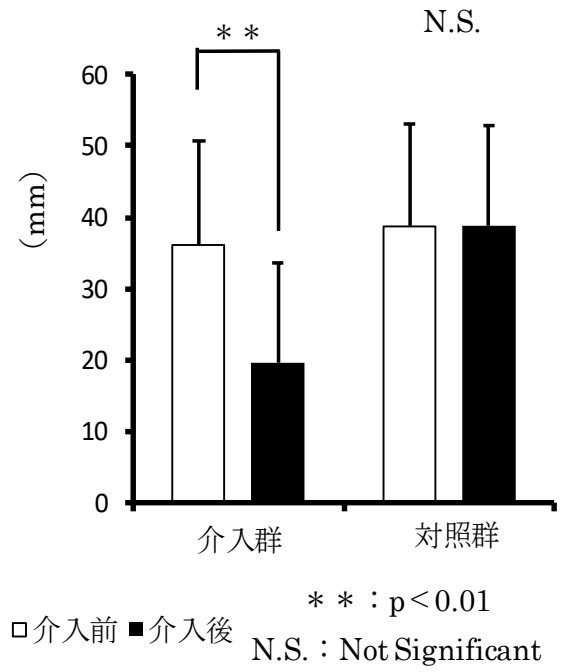

図１　介入群および対照群の介入前後の VASの変化

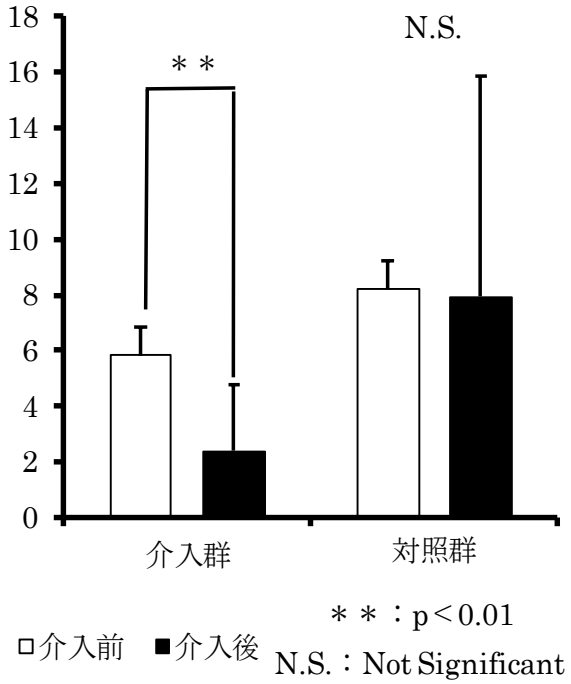

図2　介入群および対照群の介入前後の SF-MPQの変化

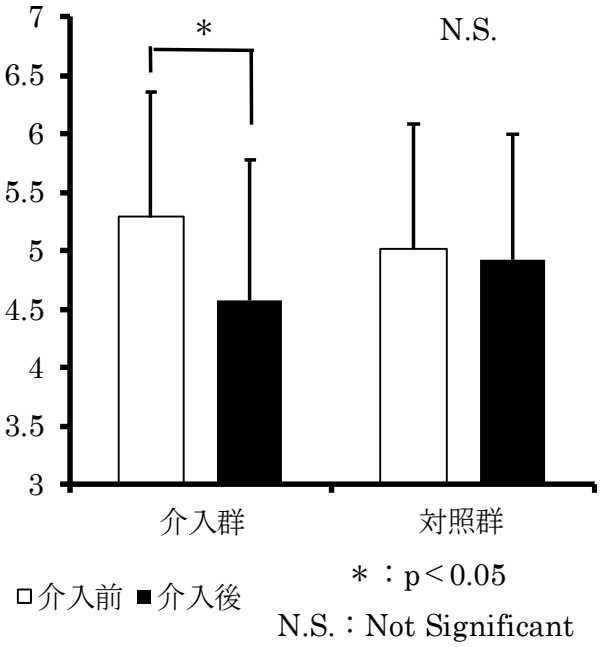

図3　介入群および対照群の介入前後の LF Lnの変化

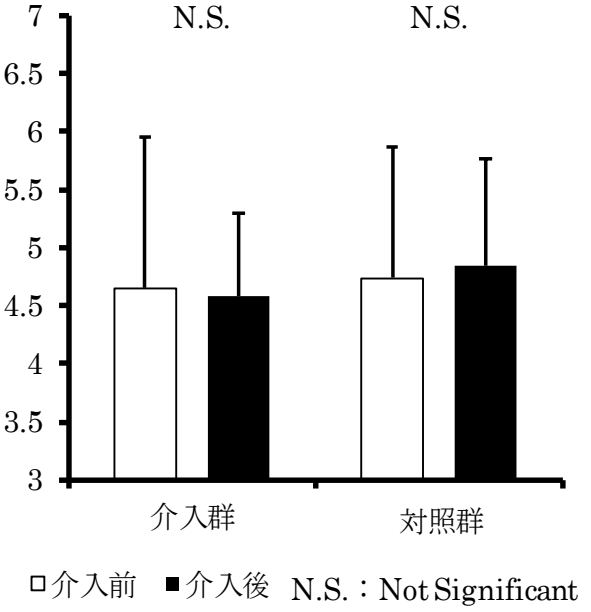

図4　介入群および対照群の介入前後の HF Lnの変化

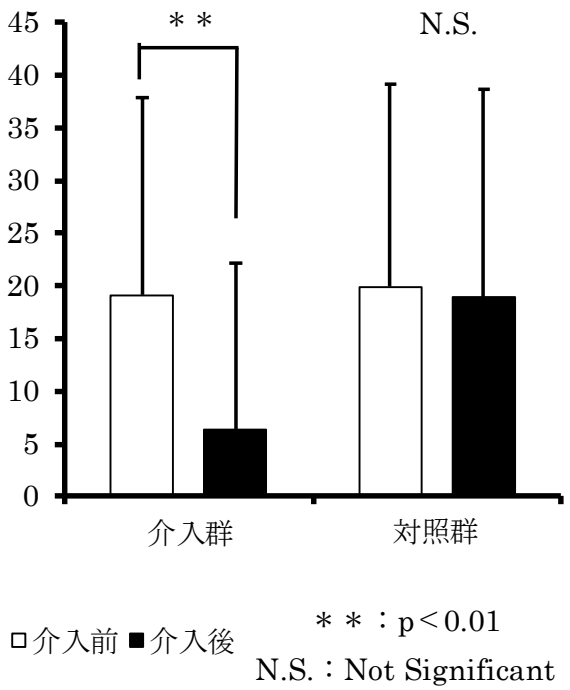

図5　介入群および対照群の介入前後の
POMS2の変化

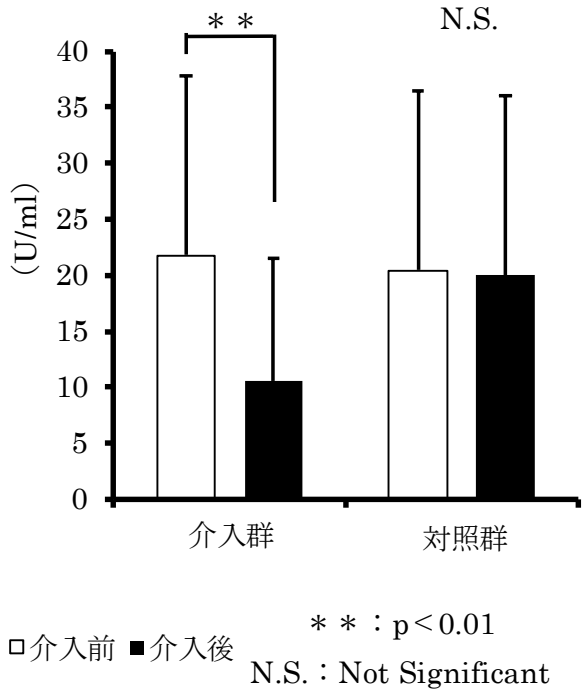

図6　介入群および対照群の介入前後の
唾液アミラーゼ濃度の変化

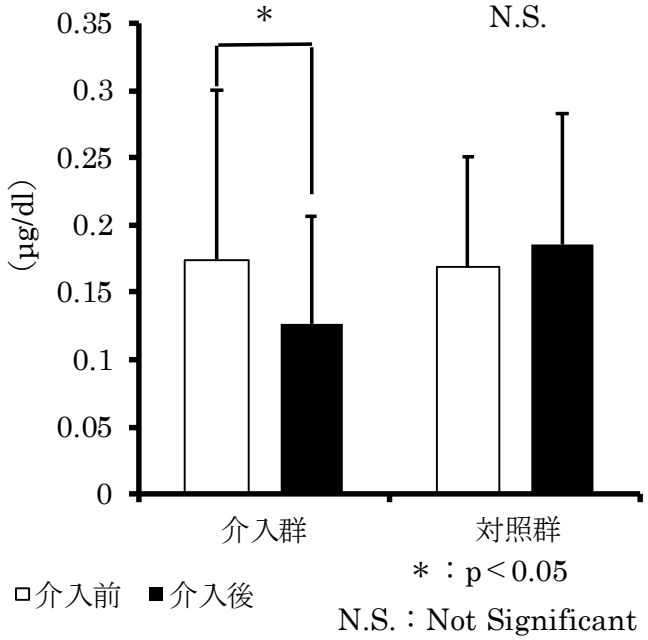

図7　介入群および対照群の介入前後の
唾液コルチゾル濃度の変化

情動を評価する POMS2 は，介入群の介入後が 6.4±15.8 で，介入前の 19.1±18.8 と比較して介入後で有意に低値を示した（p＜0.01）（図 5）．一方，対照群の介入後は 18.9±19.8,

介入前は 19.9±19.2 であり，介入前後で有意な差は認められなかった．

唾液アミラーゼ濃度は介入群の介入後が 10.6±10.9 U/ml で，介入前の 21.8±16.0 U/ml と比較して介入後で有意に低値を示した（$p < 0.01$）（図 6）．一方，対照群の介入後は 20.0±16.0 U/ml，介入前は 20.4±16.0 U/ml であり，介入前後で有意な差は認められなかった．唾液コルチゾル濃度は介入群の介入後が 0.13±0.08 μg/dl で，介入前の 0.17±0.13 μg/dl と比較して介入後で有意に低値を示した（$p < 0.05$）（図 7）．一方，対照群の介入後は 0.19±0.10 μg/dl，介入前は 0.17±0.08 μg/dl であり，介入前後で有意な差は認められなかった．

【考察】

本研究では，身体に疼痛を有する対象を介入群と対照群に割り付け，疼痛，自律神経活動，情動の変化を検討した．その結果，次の点が明らかになった．1）両群の介入前の測定項目，対照群の介入前後の各種測定項目において有意な差は認められなかった．2）介入群は，徒手刺激に伴い疼痛の減弱，交感神経活動の抑制，情動の改善，唾液アミラーゼ・コルチゾル分泌の抑制が有意に認められた．

両群の介入前の測定項目，対照群の介入前後の測定項目において有意な差が認められなかったことから，介入群の介入前後の測定項目の有意な差は徒手刺激による影響と考えられる．徒手刺激は，当該関節の受容器で検知されると末梢神経系および外側脊髄視床路を経て，脳にその情報が送られると想定される．脳に送られた徒手刺激の情報は，情動の改善が認められたことから大脳辺縁系に伝達され，視床下部に情報を出力したことが考えられる[11]．その結果，交感神経活動が抑制され，視床下部−下垂体−副腎皮質系（HPA 系）および交感神経−副腎髄質系（SAM 系）の作用も低下し，唾液アミラーゼ・コルチゾルの分泌が抑制されたものと考えられる．

徒手刺激に伴う自律神経活動に及ぼす影響については複数の研究[12,13]が行われているものの，徒手刺激の内容，疼痛の有無等の条件が様々であり，意見の一致がいまだなされていない．しかしながら，本研究で明らかになった徒手刺激に伴う交感神経活動の抑制と自律神経系の効果器と言える唾液アミラーゼ・コルチゾル分泌の抑制は，徒手刺激に対する体性‐自律神経反射[14]の関与が示唆される．体性‐自律神経反射の影響は全身的なものであり，本研究で明らかになった知見により血管系や骨格筋といった各器官への波及効果も考えられるが，本研究の結果のみでは言及できない．今後も，徒手刺激に伴う疼痛の軽減の機序について，体性‐自律神経反射における効果器の変化という視点で詳細に分析する必要性がある．

本研究には次のような限界がある．1）対象者は疼痛を主訴としているものの部位および診断名が様々である．2）自律神経活動に影響を及ぼすと考えられる実験の実施時間帯，食事時間，睡眠状況を配慮していない．3）本研究では対象者の介入前後の測定項目を比較することが主目的であるため，疼痛を有していない人との各種測定値の比較は行っていない．4）徒手刺激に伴う脳の各部位の直接的な活動の変化は検証できていない．5）徒手刺激は全例，著者が実施しており，測定項目の結果に偏りが生じた可能性がある．

【おわりに】

徒手刺激に伴い疼痛が軽減する機序を明らかにすることを目的に，身体に疼痛を有する人を対象に徒手刺激を実施し，疼痛，自律神経活動，情動の変化を検討した．その結果，疼痛の減弱とともに交感神経活動の抑制，情動の改善，唾液アミラーゼ・コルチゾル分泌の抑制が認められ，徒手刺激が HPA 系，SAM 系に影響を及ぼすことが明らかとなった．本研究で明らかとなった徒手刺激に伴う体性 - 自律神経反射の発現は，情動の変容とともに徒手刺激により疼痛が軽減する機序を検討する一助となり得ると考えられた．

【謝辞】

本論文は，著者が順天堂大学大学院医学研究科医科学専攻修士課程に在籍中の研究成果をまとめたものである．本研究にあたり直接のご指導を頂いた順天堂大学大学院　医学研究科病院管理学教授・小林弘幸先生，同研究科漢方先端臨床医学講師・山口琢児先生，同研究科漢方先端臨床医学協力研究員・胡愛玲先生に深謝する．

【文献】

1) 井上雅之：慢性痛に対するリハビリテーション．Pain Rehabil 6(1)，16-24，2016
2) 沖田実，松原貴子：痛みの理解．ペインリハビリテーション，2-7，三輪書店，東京都，2019
3) 小川節郎：交感神経と疼痛．医のあゆみ 195（9），641-645，2000
4) 「慢性疼痛診療システムの均てん化と痛みセンター診療データベースの活用による医療向上を目指す研究」研究班：徒手療法は慢性疼痛に有効か？．慢性疼痛診療ガイドライン，135-136，真興交易，東京，2021 年
5) 脇元幸一：筋スパズムと交感神経活動異常に対する理学療法–痛みの成因とその助長因子への対策–．理療 27(1)，38-53，1997
6) Solange A，David G，Jeffrey BM，et.al：Hemodynamic regulation: investigation by spectral analysis，Am J Physiol 249，867-875，1985
7) 長谷川守，服部卓：Visual Analogue Scale（VAS），McGill Pain Questionnaire（MPQ）．J Clin Rehabil 15（2），160-167，2006
8) Juvia PH,DouglasMM，横山和仁（監訳）：POMS2 日本語版マニュアル．金子書房，東京，2015
9) 山口昌樹：唾液マーカーでストレスを測る．日薬理誌 129，80-84，2007
10) 尾崎純，嵩下敏文，島谷丈夫：脇元幸一（監修）．Spine Dynamics 療法，運動と医学の出版社，神奈川，2014
11) 鈴木郁子，内田さえ，鍵谷方子ほか：7　情動．鈴木郁子（編）．やさしい自律神経生理学，219-224，中外医学社，東京都，2015
12) 猪原康晴，宮本重範，青木光広：胸椎椎間関節モビライゼーション手技が心拍変動に及ぼす影響．札幌医大保健紀 8，7-12，2005
13) 竹本民樹，河村知範，西村真人ほか：関節学的アプローチー博田法が健常者の自律神経機能に与える影響について．日関節運動アプローチ医会理作療士会誌 6，104-107，2013

14) 鈴木郁子，内田さえ，鍵谷方子ほか： 27　体性感覚刺激による自律神経機能の調節．鈴木郁子（編）．やさしい自律神経生理学，175-179，中外医学社，東京都，2015

作業療法の一部を経験することでどのような技能や態度を修得できるのか
―作業療法学生のフォーカスグループインタビューによる分析―

清水　一輝　加藤　真夕美　外倉　由之

愛知医療学院短期大学　リハビリテーション学科　作業療法学専攻

What skills and attitudes can be acquired through partial experience in occupational therapy?
-Analysis through focus group interviews of occupational therapy students-

Shimizu Kazuki　Kato Mayumi　Tokura Yoshiyuki

【要旨】

本研究の目的は，作業療法学生が作業療法の一部を経験することで，どのような技能や態度を修得するのかを明らかにすることである．デイケアでのレクリエーションを経験した作業療法学専攻 2 年生 4 名を対象にフォーカスグループインタビューを実施した．インタビューの内容を SCAT(Steps for Coding and Theorization)を用いて分析した結果，作業療法を経験することは，対象者との交流における対象者理解や援助技術の修得に加え，多職種連携の重要性の理解にもつながっていた．一方で，作業療法の一部を経験することは，精神運動領域と情意領域での学びが主となるため，それを補う認知領域での学びの枠組みを構築していく必要が示唆された．

キーワード：作業療法学生　作業療法教育　教育効果　質的研究

【はじめに】

1．背景

作業療法教育では，実際の現場で作業療法を経験し，作業療法士に必要な技能や態度を学ぶことが重要であり [1]，その中でも臨床実習は作業療法実践能力を身につけるため，人間関係能力を育成する重要な機会である [2]．愛知医療学院短期大学（以下，本学）では 3 年次に評価実習科目と総合実習科目が配置されており，作業療法士として必要な技能を身につける機会となっている．それに加え，臨床実習までの学習において学内演習を実施することが必須であり [1]，臨床実習での学びを確実なものにするために段階的な学習を実施していく必要がある．

臨床実習に向けた学内教育では事例情報に基づいた演習が実施される．しかし，そのような演習で，作業療法の臨床思考過程を学ぶことはできるが，実際の場面での事例との交流が行えず，対象者との信頼関係の構築や多職種連携に必要な技能の修得が不十分になりやすい [3]．作業療法での対象者との会話や実践する環境が作業療法実践を進める上では重要であり [4]，対象者との交流が必要となる，相互交流的リーズニング，叙述的リーズニングや実際の環境に合わせて行う実際的リーズニングを経験することは難しく，臨床実習に

向けて作業療法を学ぶ際の制約となっている可能性がある．

本学は附属のゆうあいクリニック・デイケアセンター（以下，デイケア），ゆうあいこども園を有しており，それらの附属施設と連携しながら学生教育を行うことが特色である．特にデイケアでは，臨床実習はもちろん [5]，デイケア行事への学生参加，デイケアのボランティアなど，様々な形で連携しながら，実際の臨床現場に近い環境で学生教育を行っている．

2022 年度 2 年次配当科目の地域作業療法学実習の授業において，デイケアの利用者へのレクリエーション（以下，レク）を，学生グループで計画し実施している．レクは作業療法が目標とするその人が望む生活行為の一つであり，治療方法の一つとして用いられる [6]ものであり，学生がレクを計画し実施することで作業療法の一部を経験することができる．また，レクが QOL の改善につながる可能性 [7]も報告されており，レクを実施することは作業療法士にとって重要な技能の一つであるといえる．レク実習を通して作業療法の一部を経験することで，作業療法士として必要な技能を学び，学内教育では修得が難しい技能の修得につながっている可能性がある．

2．目的

本研究の目的は，作業療法学生が作業療法の一部であるレクを計画し実践するという経験から,どのような技能や態度を修得するのかを明らかにすることである.その結果から，作業療法学生の教育方法の探索を行う．

3．地域作業療法学実習の講義概要

地域作業療法学実習は 2 年次に通年で開講している必修科目であり，授業時間数は 45 時間である.「対象者を評価するための視点を実際のプログラムと結びつけ対象者に提供する作業を計画できる」,「対象者と適切に関わることができる」ことが到達目標の一部として掲げられており,その到達目標を達成するために,デイケアでレク実習を行っている．レク実習は，学生が 7～8 名のグループを作り，デイケア利用者に対するレクを計画し実施するものである．レクの実施時間は 50 分程度であり，事前にデイケア勤務の作業療法士からデイケア利用者の情報収集を実施した上で，学生が主体となりグループでレク計画の立案，レク物品の準備，レク本番のリハーサル等を教員の援助を受けながら実施している．レク実施後は，学生グループでの振り返りを行い，レク実習で学べたことを履修した学生全員で共有している．

【方法】

1．対象

本学リハビリテーション学科作業療法学専攻 2 年生のうち，地域作業療法学実習の講義を履修し，デイケアでのレクリエーションを実施した 35 名のうち，研究の目的等を説明し協力が得られた 4 名（男性 1 名，女性 3 名　平均年齢:20 歳）を対象とした．

2．データ収集

対象者には，半構造化面接によるフォーカスグループインタビューを実施した．フォー

カスグループインタビューとは，参加者にとって話しやすい環境であり深い議論が可能であることが特徴である [8]．今回は，参加者同士の相互作用により参加者の経験を明らかにするため本方法を採用した．実施場所は，研究参加者にとって馴染みがある大学内の教室を利用し，インタビューは研究参加者全員の同意を得て録音した．

インタビューガイドは，1.実習で印象に残っていることはなにか，2.実習で大変だったことはなにか，3.実習で学べたことはなにか，の 3 点とし，筆者はファシリテーターとしてグループに参加した．筆者は，インタビューガイドをもとに学生同士で意見交換をできるように場に働きかけ，全員がある程度均等に発言できるように配慮しながら，実習でどのような経験をしてどのような学びがあったのかを聞きとった．インタビュー時間は 71 分であった

3. インタビューデータの分析

録音したデータから逐語録を作成し質的分析を行った．データの分析は，明示的で定式的な手続きを有していることや比較的小規模のデータ分析にも有効であるとされている SCAT(Steps for Coding and Theorization)[9]を用いた．その分析手順は，マトリクスの中にセグメント化したデータを記述し，1.データの中の着目すべき語句，2.それを言いかえるためのデータ外の語句，3.それを説明するための語句，4.そこから浮かび上がるテーマ・構成概念の 4 ステップでコーディングを行うものである．生成されたテーマ・構成概念からストーリーラインを作成し，理論記述を行った．SCAT の結果は，研究分担者とともに分析し，分析した結果は研究参加者によるメンバーチェッキングを実施し同意を得た．

【結果】

SCAT による分析の結果（表 1），37 のテーマ・構成概念が生成された．以下，ストーリーラインと学生の学びに関する理論記述である．ストーリーラインの下線部は生成されたテーマ・構成概念である．

1. ストーリーライン

高齢者の<u>積極的な参加姿勢</u>や<u>交流による肯定的変化</u>を実感し，<u>世代間交流による相互理解</u>や<u>加齢への肯定的理解</u>が進んだ．<u>ステレオタイプの高齢者理解</u>による<u>過度な干渉</u>をした場面もあったが，対象者の<u>個別性の理解</u>をすることで，<u>段階付け</u>や<u>個別対応の重要性</u>を実感した．その一方で，<u>援助するべき対象範囲</u>の広さを知り，直接的な個別対応だけでなく<u>間接的な支援技術</u>が必要だと気付き，<u>対人交流技能</u>や<u>観察技術</u>も学んでいた．また，<u>起きうる事態の予見</u>が不十分なことに加え，対象者の<u>想定を超える行動</u>など<u>現場で得られる情報</u>への<u>臨機応変な対応</u>や<u>想定外の出来事への対処</u>が難しく，<u>知識と経験のギャップ</u>や<u>対象者の情報不足</u>に気づくなど，<u>無知の自覚</u>がされたことで<u>実践につながる準備</u>の重要性を学んだ．

表 1　SCAT 分析の一例

発話者	テクスト	<1>テクスト中の注目すべき語句	<2>テクスト中の語句の言いかえ	<3>左を説明するようなテクスト外の概念	<4>テーマ・構成概念
D	何かうちらは、司会っていうか、主にまとめるっていうか、主に進める人が1人固定で、そのサポートを1人がして、その人がこの辺の人を見て、で、誰々はここ、誰々はここって、ほんとに固定で初めから決めちゃってたから、前半だったんだけど、後半になって外に出て、ぱって見て、「こんな、人、ここにいるんだな」みたいな。やってる時は、ほんとそこしか見えてなかったから、逆に視野狭かったなって。	視野	視点，気づき，観点，	個別での対応と集団としての対応のジレンマ，直接的な介入ができない不安	援助するべき対象範囲，間接的な支援技術
B	誕生日席のほうの、は、誰もいなかった、生徒。先生いてくれるから大丈夫かなと思って、あまり行かなかったから交流になってないし、うん。健康って若い人からしゃべりかけるの健康にする、なるに、「元気になりたいな」とか、見てて、「あ、若い、いいな」とか「自分も元気にいたいな」とか思えるかもしんない機会じゃん。だけど、それが話し掛けないことによって生み出しもしないし、そこに置かれているだけであって、ここの中でみんなでやってる感がなかったから、もうちょっと行ったほうが良かったかなって後から反省するよね。グーチョキパーの時にこうやって近寄って行ったんだけど。それ以外はなかなか行けない。	交流，機会	関係，やりとり，関わり，チャンス，場面，好機	世代間交流による影響	交流による肯定的変化
C	でも、うちは催促しなきゃいけない時になったら、時間を出そうみたいな感じで言ってたけど、結局前半は時間を計るっていうのを私は忘れてたし、リーダー的っていうか、司会役の子は多分計ってくれてたのかはまあ分かんないけど。	催促，時間	促し，要求，要望，依頼，時，制限，制限時間	決められた枠組み，求められる時間	求められる役割
C	違うだろうっていうふうにはリハーサルでも言った。リハーサルの後の反省とかでも言ってたけど、こんなに違ってくるんだな、みたいな。ここまで。	違う，リハーサル	差異，予定外，予想外，想定外，準備，計画，予測，	想定ができていない状況	実践につながる準備力
C	こっちはもう完成するかどうかと、時間に追われるのとで、もう「どうしよう、どうしよう」みたいな感じでずっと思いながらやってる人もいる。	時間，追われる	時，制限時間，焦り，不安，焦燥，	決められた枠組み，求められる時間	求められる役割
C	その時に、そう、終わってからもうクイズをやれば良かったっていうのがすっごい反省で。そう。目的潰してるっていうのが、もう「あー」ってなって、もう後からやれば良かったなみたいな。そう、だけど、結局それは当日にならないと分からないことだから、もうちょっと早く気付いて、今やるんじゃなくて、時間が余ったらやるみたいな感じで。	早く，気づいて	事前，予見，気づき，対応，対策，準備	事前に予測できる可能性，変化に対する気づき，瞬時に求められる対応	起きうる事態の予見，想定外の出来事への対処
C	作業の、ほんとに作業の差がばらつきがすごいから、ほんとに何か富士山と桜みたいな感じやったんやけど、山の麓の人は、ほんとにこんだけみたいな。こんだけのちぎって貼ってっていう感じだったから、もう全然違う、ほんと画用紙のもう半分以上を貼ったりしなきゃいけない人もいれば、もうここだけを、この4分の1ってか、半分以下ぐらいをやる人もいればっていう感じですごいばらつきが出て、どうなるかなと思いつつ、無理やり終わらせてたところもあれば、早く終わっておしゃべりしてたところもあればって感じだったけど。難しい。難しい。	作業，差，ばらつき，無理やり	進行，進捗，遂行，違い，様々，個性，強引，一方的，	各自の作業遂行能力，優先される運営側の都合	個別対応の重要性，求められる役割

表 1　SCAT 分析の一例（つづき）

発話者	テクスト	<1>テクスト中の注目すべき語句	<2>テクスト中の語句の言いかえ	<3>左を説明するようなテクスト外の概念	<4>テーマ・構成概念
B	さっき、Cが言ってた、主観的、客観的って話をすごい結構してたと思うんですけど、作業療法士になっても自分たちはカルテ見て、「こういう人が来る」って思って用意してくけど、多分実際にやる患者さんと性格とかも違うし、同じ症状でも絶対同じ人がいるわけじゃないから、そこを、カルテっていうか、それの紙を見ただけで決め付けないってことを今回すごい学べたかなって思ったんで、自分が作業療法士になった時も、この症状だからこうだろうとか、これはできるけどこれはできないだろとか、そういう決め付けを絶対しないほうがいいなって思って、そこは今回で一番学べたかなって思いました。	実際，違う，決めつけない	直接，事実，事態，違い，差，予想外，固定概念，偏見，先入観，思い込み	歪んだ知識のフレーム，排除するべき思考	知識と経験のギャップ，無知の自覚
D	本番がとかじゃなくて準備段階で思ったのが、作業療法士って、ここに来る前は1対1みたいな。患者さんがいて、自分がいて、リハビリをするって思ってたけど、でも、そうじゃないじゃないですか。チーム医療とか、多職種連携とか。その1人の患者さんに対して何人もいて、で、介入してくみたいな。それ、今回と同じだなって思って。1つのことに対して1人がどんだけ頑張ってもいいものは作れないし、みんながおんなじ気持ちでおんなじところを向いてないといいもの作れないし、何か自分で言うのもあれだけど、頑張ったなって思うんですよ。	チーム医療，他職種連携，同じ	チーム，連携，協力，協働，協調，目標，目的，指向，統一，共通認識，	協働的取り組みの必要性，個別の価値判断，共通理解の確立	共通理解の確立，個別性の理解
A	実際にやった感じ、一応自分たちのグループで能力っていうか、どこを高めようとか決めてたけど、自分はそんな実際その意識できてなかったから、目の前にできない患者さんがいるじゃないですか。例えば、人数が人数だから、3人に1人で1枚の紙だったんで、やっぱり届かないとこもあるじゃないですか。この手伸ばしてるじゃないですか。その時に自分はどうすれば、終わった、その時に自分は紙こうやって、やって貼ってもらったんですけど、そのもう1個患者さんに紙近づければみたいな、甘やかし過ぎたっていうのかな。何ていうんだろう。	甘やかしすぎ	思い込み，先入観	排除するべき思考，行動するまでのリーズニング	無知の自覚，各個人の行動のリーズニング
C	そう、何か変わっちゃったんじゃないかなってちょっと。全体的に思ったわけじゃないんですけど、一部そう思うところもあって、将来自分がもしそうやってレクリエーションとかリハビリとかをプランを組んだりとか、評価をしていくとかってなった時に、やってあげるだと、その人の本当の姿っていうかは、見えないんだろうし、それこそ自分たちがここにあるものをこうやって取ろうっていうのを見たくてやってもらうでも、届かなくてちょっと無理みたいな感じでこのまま止まってる人でも、声の掛け方でちょっとここを押してあげたりとかすれば、前に届くとかもできるだろうから、話がちょっと全然違う方向に行ってるけど。	やってあげる，やってもらう	工夫，段階づけ，	目的を達成するための手段，個別性に合わせた対応，その場での反応に合わせた調整	段階付け，個別対応の重要性，臨機応変な対応

作業の目的の具体化や作業の文脈の重要性を理解しながらも，学生集団での意思決定の困難さや限られた時間の影響で不明瞭な目的となり，援助技術の他者共有もできず各学生の行動のリーズニングや目標実現の方法が統一されないため対応の相違による不都合が生じた．成果につながる意見交換や目的意識の共有を進め，集団で共通理解の確立をするために的確な情報伝達方法が必要であることを学んだ．また，集団の中で求められる役割を意識することが多職種連携の価値を認識する経験となった．

2．理論記述

- 高齢者の積極的な参加姿勢や交流による肯定的変化を実感し，世代間交流による相互理解や加齢への肯定的理解が進む．
- ステレオタイプの高齢者理解による過度な干渉をした場面もあったが，対象者の個別性の理解をすることで，段階付けや個別対応の重要性を実感する．
- 援助するべき対象範囲の広さを知り，直接的な個別対応だけでなく間接的な支援技術が必要だと気付き，対人交流技能や観察技術を学ぶ．
- 起きうる事態の予見が不十分なことに加え，対象者の想定を超える行動など現場で得られる情報への臨機応変な対応や想定外の出来事への対処が難しく，知識と経験のギャップや対象者の情報不足に気づくなど，無知の自覚がされたことで実践につながる準備の重要性を学ぶ．
- 作業の目的の具体化や作業の文脈の重要性を理解しながらも，集団での意思決定の困難さや限られた時間の影響で不明瞭な目的となり，援助技術の他者共有もできず各学生の行動のリーズニングや目標実現の方法が統一されず対応の相違による不都合が生じる．
- 成果につながる意見交換や目的意識の共有を進め，共通理解の確立をするために的確な情報伝達方法を学ぶ．
- 求められる役割を意識することが多職種連携の価値を認識する経験となる．

【考察】

1．高齢者との作業を介した交流により修得した作業療法の技能や態度

高齢者とこども世代の世代間交流プログラムにおいて，高齢者への尊厳の増加という世代間の相互理解が高まる[10]とされている．今回の結果からも，高齢者とレクという作業を用いて交流することで，世代間の相互理解が進み加齢への肯定的変化や高齢者の個別性の理解へと繋がっていた．対象者を理解することは，援助者がクライエントから選ばれるためにも重要[11]であり，クライエントとの良い治療関係を築くために作業療法士にとって他者理解が重要である．他者理解はそう簡単に成し遂げられるものではない[11]ともいわれており，今回の経験はあくまできっかけではあるが，作業療法の一部を経験する機会が対象者理解を促進する一手段になりうると考えられる．

それに加え，作業療法の一部を経験することが対人交流技能や観察技術の修得にもつながっていた可能性がある．対人援助に必要な，コミュニケーション能力，協調性，課題発見力，責任感，積極性などは学校教育の中で育成されるべき能力である[12]が，実際の現場で作業療法を経験することで，対人援助に必要な技能や態度を育成できる可能性が示され

た．さらには，する行為と同じかそれ以上に積極的な援助技法[13]とされる，見守るなどの間接的に他者と関わる際に必要な技術も身につけることができる可能性がある．

実習を経験している学生の 1 割がインシデント・アクシデントの経験がある[14]と言われており，危険予知に対する教育は重要である．シミュレーション体験[15]や模擬患者での学習[16]で，危険予知に関連する教育の効果も示されているが，実際の臨床現場での気づきから学ぶことも多くあることが推察される.今回のように,附属施設での実習であり，デイケアスタッフに加え教員も同席している状況での実習で緊急的な対応の経験ができたことは，リスク管理ができた状況で作業療法士として必要な危険予知の能力の修得にもつながる可能性が示された．

上記のような様々な学びをした一方で，学生は今回の実習での即興的な対象者とのやり取りの中で，これまで学んできた知識だけでは現場での対応ができない経験に戸惑い，無知を自覚する機会となっていた．教育では，相手に無知を自覚させ，真の知恵を得たいという意欲を抱かせて，自ら真の知恵に至れるように支援することが重要[17]である．省察的実践家としての作業療法士になるために，無知の自覚をすることは重要な学びであると言える．

2. 多職種連携の重要性の理解

今回は学生グループでのレクの実施となったことで，集団での意思決定の困難さを経験していた．また臨床現場の作業療法士や看護師との情報交換の経験からも，多職種連携の重要性の理解へと繋がっていた．多職種連携はリハビリテーション医療において必須であり，多職種連携教育は多くの養成校で行われている[18,19]．作業療法実践を経験する中で必然的に起こる多職種との交流や学生同士の交流が，多職種連携教育へと繋がる可能性がある．

3. 作業療法士のアイデンティティの構築に向けて

作業療法士養成教育においては,Bloom らの提唱した精神運動領域，情意領域，認知領域の 3 領域の教育目標が重要視されている[20]．今回の実習では，対人交流技能や観察技術など精神運動領域，情意領域での学びが主であったが，それらは対人援助の専門職が共通して身につけるべき知識であるとも言える．作業療法の独自性は，作業に焦点を当てた実践であることであり，作業に関する認知領域での学びが重要となってくる．Kolb が提唱した経験学習のモデルにおける内省的観察では，経験した後の振り返りの重要性が示されている[21]．今回の実習においても実習後の振り返りを実施したが，作業療法の理論をもとにした振り返りを行うなど，作業療法の独自性に繋がるような学びの成果をより確かにしていく必要があると考えられる．

【研究の限界】

本研究の限界として，事前に研究参加によって不利益を被ることがないことを説明しているが，筆頭筆者は対象者 4 名が在学する養成校の教員であり，解答に何らかの影響を与えた可能性を否定できない．また，今回のインタビューはレク実習後に実施したものの，他に受講している科目で得た知識が影響している可能性もある．

【結論】

本研究により，作業療法の一部を経験することが作業療法士に必要な技能や態度にどのような影響を及ぼすかが明らかとなった．臨床現場での作業療法を経験することは，対象者との交流における対象者理解や援助技術の修得に加え，多職種連携の重要性の理解にもつながっていた．一方で，作業療法の一部を経験することは，精神運動領域と情意領域での学びが主となるため,それを補う認知領域での学びの枠組みを構築していく必要がある.

【謝辞】

本研究の実施にあたり，ご協力いただきました 4 名の学生に心より感謝申し上げます．また，学生の実習にご協力いただきました，ゆうあいデイケアセンターの職員の皆様に深く感謝の意を表します.

【文献】

1) 一般社団法人　日本作業療法士協会．作業療法臨床実習指針（2018）　作業療法臨床実習の手引き（2022）
https://www.jaot.or.jp/files/shishin2018.tebiki2022.2.pdf（参照 2022-10-14）
2) 一般社団法人　日本作業療法士協会教育部．作業療法教育ガイドライン（2019）作業療法士養成教育モデル・コア・カリキュラム（2019）
https://www.jaot.or.jp/files/page/wp-content/uploads/2013/12/Education-guidelines2019.pdf（参照 2023-1-24）
3) 清水一輝，加藤真夕美，高田政夫ほか：臨床実習の代替となる学内実習で学生が学べたこと・学べなかったこと―計量テキスト分析を用いて―. 愛知作業療法 30，4-10，2022
4) 吉川ひろみ：COPM・AMPSスターティングガイド．医学書院，2-11，2008
5) 加藤真夕美，清水一輝，渡邊豊明ほか：総合実習の代替としての学内実習記録と教員が費やした時間の調査．愛知医療学院短期大学紀要12，61-69，2020
6) 村井千賀：第 1 章　レクリエーションの基本理念．寺山久美子，中村春基（編）．レクリエーション　活動と参加を促すレクリエーション　第 3 版．26，三輪書店，東京，2021
7) 坂本将徳，佐藤三矢，駒崎卓代，津田隆史：集団レクリエーション介入が認知症高齢者における行動・心理症状(BPSD)および QOL に及ぼす効果．理学療法科学 32 (4)，487-491，2017
8) Pranee Liamputtong 著，木原雅子，木原正博監訳：質的研究法:その理論と方法-健康・社会科学分野における展開と展望. メディカルサイエンスインターナショナル, 81-107, 東京，2022
9) 大谷尚:質的研究の考え方　研究方法論から SCAT による分析まで.名古屋大学出版会，270-277，名古屋，2019
10) 糸井和佳，亀井智子，田髙悦子ほか：地域における高齢者と子どもの世代間交流プログラムに関する効果的な介入と効果:文献レビュー．日本地域看護学会誌，15(1)，33-44，2012

11) 村田久行：対人関係における他者の理解 現象学的アプローチ.東海大学健康科学部紀要，6，109-114，2000
12) 堀本ゆかり：理学療法士のための対人援助技法．理学療法学，41(4)，233-238，2014
13) 中島紀恵子：第 1 章　介護の働き．福祉養成講座編集委員会（編）．新版　社会福祉士養成講座 14　介護概論第 2 版．41，中央法規出版，東京，2004
14) 日下知子，松本明美，沖田聖枝：看護学臨地実習におけるインシデント・アクシデント調査報告：事故防止に対する教育方法の検討．川崎医療短期大学紀要，27，7-12，2007
15) 高木彩，川西千恵美：ヒヤリハット・シミュレーション体験が看護学生のリフレクションに与える影響. The Journal of Nursing Investigation，8(1,2)，38-44，2010
16) 米田照美，伊丹君和，関恵子ほか：医療事故が起こりやすい状況下での車いす移乗介助体験による看護学生の医療事故の理解度と危険認知力の変化.日本教育工学会論文誌，41 (Suppl.)，17-20，2018
17) 安部日珠沙：現代の学校教育とソクラテスの産婆術との関連性についての考察．岐阜聖徳学園大学教育実践科学研究センター紀要，19，223-230，2020
18) 榎田めぐみ，鈴木久義，片岡竜太ほか：多職種連携実践に向けて医系学生が身につけた能力とは?―卒前の多職種連携教育の意義―．医学教育，49(1)，35-45，2018
19) 首藤英里香，澤田いずみ，中村充雄ほか：保健医療学系 3 学科合同による段階的多職種連携教育の評価:卒業生を対象にしたフォーカスグループインタビュー．札幌医科大学札幌保健科学雑誌 9，41-47，2020
20) 平上二九三：理学療法と作業療法の臨床実習教育の刷新―20 年ぶりの養成施設指定規則改正によせて―．吉備国際大学研究紀要(医療・自然科学系)，29，21-39，2019
21) 中原淳：経験学習の理論的系譜と研究動向．日本労働研究雑誌，55（10），4-14，2013

障がいを有する高齢者における世代間交流の有用性
―学生と子どもとの関わりに関する質的分析―

濵田　光佑 [1,2,3]　三浦　明子 [2]　寺村　晃 [3]

1)愛知医療学院短期大学　リハビリテーション学科　理学療法学専攻
2)愛知医療学院短期大学附属　ゆうあいリハビリクリニック・ゆうあいデイケアセンター
3)大阪大学大学院　人間科学研究科　グローバル共生学

The usefulness of intergenerational exchange among the elderly people with disabilities
―Qualitative analysis of the relationship with children and students―

Hamada Kosuke　Miura Akiko　Teramura Akira

【要旨】
本研究の目的は，世代間交流を実践する通所型サービス利用者の各世代との交流の意義を語りから明らかにすることである．方法は通所型サービスを利用する対象者 1 名に対しインタビューを行い，質的データ分析手法 SCAT（Step for Coding And Theorization）を用い分析を行なった．その結果，対象者は短期大学生との交流によって学生に対する支援者としての役割を獲得した．また，子どもとの交流によって残存機能以上の能力を発揮し ICF における生活機能を拡大させていた．以上のことから，通所型サービスでの世代間交流を含む他者との交流を通じ，精神的安心感，生きがいを得ていることが示唆された．

キーワード：世代間交流　通所型サービス　学生　子ども　SCAT

【はじめに】
近年，地域社会では独居高齢者の増加による生活の孤立化や地域内での人間関係の希薄化，高齢者夫婦間での老々介護の問題など多くの課題と直面している．そのような社会課題に対し内閣府は「高齢社会対策大綱」[1] を示し，高齢者の参加や活動の活性化を支点として高齢者と若者との世代間交流を行うことの必要性に言及し，国際生活機能分類（以下，ICF）における生活機能の向上や地域づくりの手段として世代間交流を推進している．

草野 [2]は世代間交流を「子ども，青年，中・高年世代の者がお互いに自分たちの持っている能力や技術を出し合って，自分自身の向上と，自分の周りの人々や社会に役立つような健全な地域づくりを実践する活動で一人ひとりが活動の主体となること」と述べている．糸井ら [3]の国内外の文献レビューから世代間交流が高齢者に与える影響として，世代間の相互理解，世代継承性の増加，心理的 well−being の向上，身体的 well−being の向上，社会的 well−being の向上，人間関係の広がり，地域共生意識の向上などを指摘している．さらに世代間交流は高齢者世代に「生きがい効果」，「介護予防効果」，「役割」を与えるとい

った黒岩 [4]の報告もある．そういった背景から世代間交流を取り入れた他世代の共生の場を作る取り組みが各地域で実践されている．共生型サービスの先駆的事例としては富山県の“このゆびとーまれ” [5]が挙げられ，一軒家を改築しデイサービスの高齢者と放課後デイサービスの障がい児が共に過ごし自然にお互いを支え合う仕組み,環境づくりなどが実践されている．このような相互に支え合う世代間交流の共生の場づくりが徐々に広がってきており，場を共有することでの自然に交流が生まれることが期待されている [4]と指摘されている．その一方で，依然として世代間交流の取り組みや先行研究の対象者は健常な高齢者と子どもとなっており，障がい者に関するものは対象者数や対象者自身の活動，参加が制限される故に限定的な状況である．さらに，生活機能が低下している障がい者の各世代との世代間交流の効果について，リハビリテーションの視点で質的分析した研究は見られない．

本研究では，短期大学生（以下，学生），子どもとの世代間交流に意欲的に取り組んでいる通所サービス利用者（以下，A 氏）を対象に，各世代との交流がどのような心理的変化，行動変容をもたらすのかを明らかにする．その上で，生活機能が低下している障がい者にとって世代間交流がどのような意義を持つのかリハビリテーション的視点から明らかにすることを目的とする．

【方法】

1．対象

対象は，B 通所リハビリテーション（以下，デイケア）を利用している者で，日ごろから学生や子どもとの交流を積極的に実践する A 氏とした．A 氏は，脳血管障害後遺症によって心身機能に障がいを持つ後期高齢者であり，本調査の時点で要介護 2 となっている．病前は地方議員として活動され意欲的に地域と関わっていた．また，A 氏は独居であり，介護保険を利用し週 2 回のデイケア利用と福祉用具をレンタルしている．また，生活機能の低下からデイケア以外に外出機会はほとんどない状況である．

2．A 氏のデイケアでの活動

A 氏は本調査の約 5 年前からデイケアを週 2 回利用している．デイケアでは基本的に集団体操，個別リハビリテーション，マシーントレーニングを実施している．それぞれの活動の合間には利用者同士，スタッフとの会話や卓上での創作活動，問題集の実施，雑誌の閲覧など思い思いの時間を過ごしている．また，デイケアは医療系短期大学，こども園が近隣に存在している事から学生,子どもと場所と時間を共有し活動する機会も少なくない．

3．A 氏と学生との交流

A 氏はデイケアでの活動中，学生や子どもを見かけたら自ら話しかけコミュニケーションを取ろうとする場面が観察されている．学生は医療系短期大学のリハビリテーション学科に所属している．A 氏と学生との交流は，学生が実習生としてデイケアに訪れた際の会話を中心とした交流や実習生の担当利用者として長期にわたり関わることもある．また，学生はボランティアとして A 氏の屋外散歩に同行したり，大学が主催する催しに共同で参加するなど多岐にわたる．交流頻度は年間を通じて一定ではないが，ほぼ毎月にわたり何

らかの形で学生は実習生としてデイケアの場に訪れる．

4．A 氏と子どもとの交流

A 氏はデイケアに隣接したこども園の園児とも交流の機会を持っている．日常的にこども園の園児がデイケア周囲を散歩したり，時にはデイケア内に訪れることもあり，その際には相互に挨拶を行ったり会話の機会が生まれている．また，こども園で行われる季節に応じたイベントに合わせた交流も実施されており，A 氏は子どもの姿を前にすると表情が緩み積極的にコミュニケーションを取ろうとする場面が観察される．また，A 氏は創作活動として絵や玩具を制作されることもあり，子ども達へのプレゼントとして作品をこども園に届けに行くなどの活動も実践されている．さらに，その事を契機とし子ども達がデイケアにお礼に来て A 氏と関わる姿も観察されている．

5．データ収集

研究調査は，A 氏に対し研究依頼書，説明書，インタビューガイドを用いて説明と同意を得た上で実施した．また，インタビューを実施する日時，場所を設定し本人のプライバシーが守られる状況で対面にて半構造化インタビューを行った．

インタビューに関しては，本研究の目的に照らし研究者間で協議を行い，下記のインタビューガイドを作成した．(1) デイケア利用の経緯，(2) 学生との交流について，(3) 子どもとの交流についての 3 点である．対象者の自由な語りを尊重し上記 3 点に関わる語りについて聴取した．なお，インタビューは A 氏の同意を得た上で IC レコーダーにて録音した．

また，本研究は愛知医療学院短期大学倫理委員会の承認を得て実施された．（登録番号 22007）．

6．分析方法

分析には，大谷 [6] が開発した質的データ分析手法の SCAT（Step for Coding And Theorization）を用いた．SCAT とは言語データを切片化し，以下の順序で質的に分析する方法である．(1) データ中の着目すべき語句の抽出．(2) データ外の語句を使用しそれの言い変え．(3) 言い換えを説明するテキスト外の概念を記載．(4) そこから浮かび上がるテーマ・構成概念を生成する．それらの構成概念とテーマの再文脈化を行い，ストーリーラインと理論記述する分析手法である．SCAT による分析の特徴として，本研究のような単一事例においてもデータ分析が有効である点が挙げられる．

【結果】

インタビューは 2 回に分け計 60 分程度行った．本研究においては得られたデータをもとに，SCAT の（1）～（4）のコーディングを行い，　（4）で得たテーマ・構成概念を紡いでストーリーラインを作成した．その後，ストーリーラインから理論記述を作成した（表 1）．なお，ストーリーラインを導くために用いたテキスト数は 44 個でありデイケア利用の経緯及び学生と子どもとの交流が読み取れるテキストについては表 2，3，4 に抜粋して示す．以下にストーリーラインを記載する．

＜ストーリーライン＞

A 氏は障がい者としての通所サービスの選択の中で患者中心主義的支援を行う施設の人的資源への信頼から直観的な決定でこのデイケアの利用を決めた．利用当初は社会的脆弱層への哀憫から障がい者としての自己を受け入れることや障がい者との同化への抵抗を抱いていた．しかし，障がい者としてではなく個人として受け入れられる空間であるデイケアで，施設にいる人々との交流を通じ精神的安定を得る場への愛着が生まれ，積極的参加を行うようになった．一方で，障がい者への無意識の偏見により A 氏自身が社会的弱者として扱われることへの不快感を感じることもあり，障がい者という自意識による社会との壁を作っている．時間と共に地域貢献を果たせない自己や社会的弱者としての障がい者としての自分と向き合い障がいと社会環境との折り合いをつけてきている．

A 氏は障がい者を支える学生への期待を持っており，学生が多様化している被支援者の苦悩を理解できる患者中心主義の医療者になる為に少ない臨床経験を補う障がい者としての教育者的役割を担おうとしている．向き合うのは医療従事者としての素養がある学生ばかりではないため消極的姿勢の学生に対しては，A 氏が代償的な教育者化をしており，コロナ禍による不可測な社会変化等の学生の背景への納得し，世代継承的役割を担い，その事を晩節の使命的意識を持って対応している．また，A 氏にとって学生との交流は未知の世代との交流であり障がいがもたらした交流でもある．未だに統合されていない若年層像ではあるが，高まる世代継承意識もあり，障がいによる生活機能の低下や活動機会の減少と直面しつつも，被支援者としてしか担えない役割を明確に意識し交流している．

子どもとの世代間交流に関しては，施設スタッフの子どもと偶然に時間の共有をした機会から始まり，子どもとの交流手段としての書字と子どもの視点に立ち興味を引く絵を描き始めるなど A 氏の活動に変化を及ぼしている．子どもに対する献身的行為の手段であった不格好な字を補完する絵は徐々に継続的な創作活動と独自の作品性の探求へと繋がり，期せずして非意欲的創作活動による手指機能向上に繋がった．A 氏はデイケアの子どもが存在する環境への多幸感を感じており，子どもという環境により引き出される行為は時として自然発生的治療的行為となっている．具体的には子どもとの交流で障がい者という先入観を無視した最大限の表現である麻痺側上肢の残存機能を超越した行為として子どもに向けて両手を振る動作が生じている．また，A 氏が描いた絵を子どもへ提供した際には，子どもの純粋無垢な子ども性を持った反応を体感し，精神的満足感を得る歓喜をきたした．さらに，屋外活動への消極的意識を持つ A 氏だが，子どもとの交流を理由に半強制化された活動としてこども園へ来園した．普段は自身の ADL 動作への困難感や共感されない障がい感を訴え，恐怖心を伴う高負荷動作を行わない A 氏に対し，活動する事の動機として作用している．

A 氏は内向的・閉鎖的な高齢期において，利他的思考による近親者からの孤立を自身に課しており，代償として子どもという純粋に交流できる存在への好意を抱き，子どもとの交流の中で自身の子ども性を再獲得し，同時に世代間交流に伴う精神的安定を得ている．

また，学生や子どもは A 氏にとって非障がい者の時期には交流対象とならない理解できない存在であったが，障がいや加齢に伴う精神変化として社会を断絶することへの疑問を持ち，デイケアで自然と行われていた後世を担う世代との交流が，現在では生きがいとしての後世との交流として変化している．

表 1　理論記述

①障がい者は，社会的脆弱層への哀憫から障がい者としての自己を受け入れることや障がい者との同化への抵抗を抱く．
②障がい者は，施設にいる人々との交流していくことで施設に対し精神的安定を得る場への愛着が生まれる．
③障がい者は社会的弱者として扱われることへの不快感を感じ，障がい者という自意識による社会との壁を作る．
④学生との交流機会を持つ障がい者は障がい者を支える学生への期待を持ち，学生が患者中心主義の医療者になる為に少ない臨床経験を補う障がい者としての教育者的役割を担おうとする．
⑤障がい者は晩節の使命的意識を持ち，自らを代償的な教育者化し世代継承的役割を担う．
⑥障がい者にとって学生との交流は未知の世代との交流であり障がいがもたらした交流でもある．
⑦障がい者は障がいによる生活機能の低下や活動機会の減少と直面しつつも，被支援者としてしか担えない役割を意識し実習生と向きあう．
⑧障がい者は子どもと時間の共有をすることで，自身が子どもの視点に立つ子ども性再獲得や子どもに対する献身的行為を引き出される．
⑨障がい者は子どもが存在する環境への多幸感を感じ，子どもという環境により引き出される行為は時として自然発生的治療的行為となる．
⑩子どもとの交流は障がい者の残存機能を超越した行為を引き出さす．
⑪子どもの純粋無垢な子ども性を持った反応は障がい者の精神的満足感を得る歓喜を来す．
⑫子どもとの交流は，ADL 動作への困難感や共感されない障がい感を訴え，恐怖心を伴う高負荷動作を行わない障がい者に対し活動する事の動機として作用する．
⑬高齢者は内向的・閉鎖的な高齢期において，子どもという純粋に交流できる存在への好意を抱き世代間交流に伴う精神的安定を得る．
⑭障がい者にとって非障がい者の時期には交流対象とならない理解できない存在である．
⑮障がい者が意図していない後世を担う世代との交流は，生きがいとしての後世との交流としての意義を持つ．

表 2　デイケア利用の経緯（一部抜粋）

		テクスト	<1>テクスト中の注目すべき語句	<2>テクスト中の語句の言いかえ	<3>左の説明するようなテクスト外の概念	<4>テーマ/構成概念	<5>疑問/課題
1		この施設を利用するきっかけについて教えてください．					
2	A 氏	あのね．そもそもね．この脳出血やって，どこか施設に入らないかんなって，その時に〇〇さんと〇〇先生がよ，俺に俺のとこ来てよ．こういう施設がありますけど，どうかって．あの，来てくれた．ここに入るように言って．	そもそもね/脳出血/どこかの施設に入らないかん/（紹介に）来てくれた	ことの始まり/脳血管障害/数ある介護施設からの選択/紹介にきた	デイケア利用の動機/施設の選定/身体障害	障がい者としての通所サービスの選択	
3		その様な経緯なのですね．					
4	A 氏	そしたらね，俺，そん時にいろんなところケアマネージャー持って，いろんな施設を回って，最後に決めればいいって．だから，この後，他のとこ行きますからって，話だったんだけど，その時に〇〇さんとお話しすぎて，もうここの施設の事をよ．いいのはいいんだけどよ，スタッフも十分でやる気十分だから，ここなら間違いねーなって思ってよ．もう決めた，もうどこも行かないって言うて．ここ行こうって入った．	いろんな施設を回って決める/ケアマネージャー/最後に決めればいい/スタッフと話しすぎて/スタッフも十分/やる気十分/ここなら間違いない/どこにも行かないと言った	多数の選択肢/当事者の仲介者/最終的な決定権/スタッフと気が合った/ソフト面の充実/施設の自信/直感的感覚による決定/揺るがぬ意思	施設選定に関する自己決定権/共感性の高い支援者/無形資源に対する安心/情緒的決定	施設の人的資源への信頼/直観的な決定	共感性を得た話の内容について
5		ここに入られたのは何年前ぐらいですか					
6	A 氏	〇〇年だわ．　それがここの出発だわ．最初はこういうとこ入るのは嫌だったんだ．障がい者ばっかりが集まるでよう やだなーって思ったよ．今はよう，ここに来るのがなんだ楽しみって言うかよ．生き甲斐って言うか．こんなふうに嫌々は来ないし楽しみだ．	（施設に）入るのは嫌だった/障がい者ばっかり集まる/やだなー/今は/楽しみ/生き甲斐/いやいやは来ない	入所への拒否感/社会的脆弱層の居場所/偏見/否定的感情/経時的な意識変化/現在/期待/肯定的感情/生きる理由/自主的に来所	デイケア利用への嫌悪/障がいを受けている人々に対する哀れみ/被介護者の空間/体感する事で変化する偏見/精神的支柱/自由意志による利用	社会的脆弱層への哀憫/障がい者との同化への抵抗/精神的安定を得る場への愛着/積極的参加	精神的安定を得る過程には何があるのか
7		楽しみに思う理由はありますか．					
8	A 氏	やっぱ会話だろうな．ここにいるみんなとの．家では独りぼっちなもんで．それがここの出発の．うん．	やっぱ/会話だろう/みんなとの	断定/他者との会話/来所者/スタッフ	コミュニケーション/他者/支援者	施設にいる人々との交流	

表 3　学生との交流に関する分析（一部抜粋）

		テクスト	<1>テクスト中の注目すべき語句	<2>テクスト中の語句の言いかえ	<3>左の説明するようなテクスト外の概念	<4>テーマ/構成概念	<5>疑問/課題
1		学生との交流について教えてください．学生と話すときに心がけている事はありますか．					
2	A 氏	うん．あるよ．あのね．学生はねこれからよ，こういう俺らみたいなのを手助けしてくれる先生になる人だもんで，いい先生になってもらいたいで，そういうのが頭にある．	学生はこれから/俺らみたいなの/手助けしてくれる先生/いい先生/なってもらいたい/頭にある	学生の将来/障がい者/生活支援してくれる存在/社会のためになる人物/理想的に思っている	将来の医療介護を支える若者/障がい者の良き理解者であり支援者/利他的行動を取れる人材/希望	障がい者を支える学生への期待/患者中心主義の医療者	当事者の思う「いい先生」への追及が必要
3	A 氏	だで，生徒が技術とか頭で学んでくるんですけど，患者と接することは無いはずだで．あんまり．で，こっちからしゃべらな喋ったことないもんで，今日 1 日お願いしますって言うだけで，プラスじゃないよ．だから俺はいい先生になってもらいたいから，俺の病気を言って，だからこういうところはそれぞれ障がいの程度が違うとか．他の人はわからんけど，俺はこうだよと，色々な障がい者の何と言うか，障がいのあるところを知るっていうことが大事なんだから．だから，あんたたちから喋らないかん．喋りに来なさいっていうことを教えた．	生徒が技術とか頭で学んでくる/患者と接することはない/こちらから喋らな/プラスじゃないよ/良い先生/俺の病気を言って/障がいの程度が違う/他の人/わからん/障がい者/障がいのあるところ/知ることが大事/喋り来なさい/教えた	大学の授業で習う技術や知識/対象者との交流機会の少なさ/自発的に話しかける/学習になる/求められる療法士/障がい者としての自己開示/個別性を持つ障がい/個別性/社会的弱者/障がい領域/学習の重要性/相手を知ることの重要性/指導	教育機関では学べない臨床的経験/限定的な患者との交流機会/能動的なコミュニケーション/生涯学習/障がい者の個別性を理解した要望される医療人/他者理解の不可欠さ/教育	少ない臨床経験を補う障がい者としての教育者的役割/患者中心主義の医療者/消極的姿勢の学生	教育者として具体的にどのような役割を担いたいのか
4		学生と色々とお話しくださっているのですね．					
5	A 氏	同じ腰が痛いでも場所がちょっと違うで，患者によって違うで，いろんな人をイメージして，自分の仕事の先生になったら 生かすように．それが 障がい者は喜んでくれるから．それが，あんたがいい先生になった証拠だって．	場所がちょっと違う/患者によって違う/いろんな人/イメージして/仕事の先生になった/生かす/喜んでくれる/良い先生/証拠	障がい部位の個人差/個人差/多様な患者と症状/想像する/療法士になった/活用する/対象者に喜ばれる/根拠	多様さを持つ障がい/多岐にわたる被支援者/障がい者の個別性を理解した要望される医療人/対象者から求められる医療者	多様化している非被援者の苦悩/患者中心主義の医療者	患者中心主義という概念で十分包括される内容か．
6		普段は 20 歳ぐらいの子達と話をする機会はありますか．					
7	A 氏	喋らんなぁ．喋るのが苦手なのかなあ．こっちから喋れば乗ってくるけど，自分から喋ろうという意識がねえな．	喋らんな/苦手/こっちから喋る/意識がない	自発性の低さ/不得意/患者から話す/自主性が低い	非積極的/不得手な対応/代償的な役割としての発話	消極的姿勢の学生/代償的な教育者化	学生によって役割はどの様に変容するか
8		自分（学生）のじいちゃんばあちゃん意外と話す事が無いから緊張してるのかもしれませんね．					
9	A 氏	ならいいんだけどね．だから俺からしゃべってやんだわ．だで，テスト（リハビリテーションにおける検査測定）をお願いしますて来るだろ．で，そういうのは何て言ったらいいのかよ，（学生を）相手にすんのが俺の短い残された命のなかで，少しでも役に立てばいいなってそういう感じで接することにした．	なら良いんだけど/俺から/相手にする/俺の短い命/少しでも役に立つ/接す	納得/対象者から/対応する/残された世妙/役割を担う/意識を持って対応	背景の理解/代償的な役割としての発話/残された生涯の役儀/意識的対応	学生の背景への納得/代償的な教育者化/世代継承的役割/晩節の使命的意識	医療系の学生だからこその意識なのか/他の若年層にも想起される意識なのか
10		なるほどですね．次の世代の人たちにということですね．					
11	A 氏	うん．俺はいい先生になってもらいてえ．でもよ，偉そうにするやつは一人もいなかったな．　勉強熱心で聞き上手だわ．	良い先生/なってもらいてー/でもよ/偉そうにする/1 人も居なかった/勉強熱心/聞き上手だわ	対象者に喜ばれる療法士/学生への期待/逆説/優位的立場に立つ/誰もいない/一生懸命学ぶ/傾聴能力が高い	優秀かつ共感性の高いリハビリ専門職/次世代の活躍への想望/立場をわきまえ勤勉な学生/静聴する能力	患者中心主義の医療者/障がい者を支える学生への期待/医療従事者としての素養がある学生	学生への意識をさらに開かれた質問で追及する必要あり

		テクスト	<1>テクスト中の注目すべき語句	<2>テクスト中の語句の言いかえ	<3>左の説明するようなテクスト外の概念	<4>テーマ/構成概念	<5>疑問/課題
1	A 氏	最初は．ここ（デイケア）に入って．そんなら分かりやすくする絵を色々描いた．文章と絵がマッチするかなーとおもって．そればっかか考えてよ．	最初/絵/色々書いた/マッチする/そればっか考えて	初期/絵に関する様々な取組み/絵と文字の親和性/熱心になる	繰り返される絵を描く経験/融和的な絵/意欲が高まる	継続的な創作活動/独自の作品性の探求	環境は当事者の作品作りにどのように介入したのか
2		今は趣味になってますけど，きっかけは違ったんですね．					
3	A 氏	そう．子ども，子ども．だってここはええとこだわ．本当にここはええとこだわ．保育園でもそこを（子どもが）通ると，見学して手を振るから．俺は両手を振って．これ震えがよ．これが楽しみ．	子ども/ここはええとこ/ほんとに/保育園/そこを通る/見学して/手を振る/両手を振って/楽しみ	交流の対象/真意/子どもたちの移動経路/子どもの散歩/子どもとの交流/自分に向けた行動/挨拶/好意的な行動/全身を使ったお返し/デイケア使用の理由	交流の対象/他世代/必然的な交流機会と環境/世代間交流/子どもの無邪気なコミュニケーション/行為に対する精一杯の身体的表現/生きがい	子どもが存在する環境への多幸感/子どもとの世代間交流/子どもという環境により引き出される行為/自然発生的治療的行為	対象者が子どもだからこそ出現したのか/子どもの何が行為を引き出したのか
4		どのようなことが楽しみなのですか．					
5	A 氏	（子どもに）手を振ること．バイバイとか頑張ってってくるだろ．これが今はちとこんようになったけど，前はようきよった．	手を振ること/頑張ってくるだろ/前はようよって	自身に対する興味/好意的な挨拶/純粋な行動/今はあまり来ない	子どもの無邪気なコミュニケーション/子ども性/純一無雑な姿/交流機会の減少	純粋無垢な子ども性を持った行為	子ども性について明確にする
6	A 氏	で，子どもにより．せっかくだから，ストローをよう．ストローに紙つけて．動物の．14 本（創作作品を）子どもに渡して，それ持って（子どもたちが後日に）ここ（デイケアへ）持ってきてくれた時，あれは思いっきり嬉しかったな．	ストローに紙をつけて/子どもに渡して/ここに持ってきてくれた/思いっきり/嬉しかった	子ども用の工作/子どもへのプレゼント/デイケアで反応を確認/恩返し/心から/歓喜する	子どもへの貢献意識/子ども向けの作品/好意的反応への歓喜/精神的満足感	子どもに対する献身的行為/精神的満足感を得る歓喜/子ども性の再獲得	自身の取り組みに対する正のフィードバックとなるその他の要素は
7		A さんが作った作品をみんなで持ってきてくれたわけですね．そういう（子どもの）姿を見ると嬉しいですよね．					
8	A 氏	あ，でよ，そうすると余計手を振るわなこっちは．　俺は．人が見るとアホかって思うかもしれんけどよ．うまく（麻痺側上肢を）振れんけどよ．両手でやって．	よけい手を振る/人が見るとアホかと思う/上手く触れんけどよ/両手でやって	いつも以上の行動/他者に理解されないに行動/障がいされた上肢/全力でやる好意動作	自身の能力を超えた動作/客観的な自己評価/障がいを意識させないほどの歓喜/身体表現	残存機能を超越した行為/障がい者という先入観を無視した最大限の表現	第三者の視点は行為時は意識化されていないのか
9		そうか．それでこの間も絵を渡しに行っていたのですね．					
10	A 氏	ほんでもってたら喜ぶんでねーかって思って．描いて持って行った．	喜ぶんでねーか/描いて持っていく	子どもの感情の予測/作品の贈呈	子ども意識への想像/好意的な行動	子どもの視点/子どもに対する献身的行為	
11		手渡しで（こども園へ）持ってたってことですね．					
12	A 氏	それが，俺はあそこに行くのは嫌だったもんで．うん．で，頭下げて持ってってって頼んだけど行かねって．　俺を連れてって．　あのよ，座ったりしゃがんだりがな．で，で，（作品を）渡すっていう時がしゃがんで渡せって言うからよう，〇〇さんが，　〇〇さんにはわからんと思うけどしゃがむっていうのは，ものすごく 俺にとってはあぶねーんだ．怖い．〇〇さんと一緒に居ればしゃがんで，で，（作品を）渡したところを写真撮った．　で，俺のノート（連絡ノート）のところに写真のっとる．　子どもに手渡ししたところの．	あそこ/行くのが嫌だった/頭下げて/頼んだ/俺を連れてって/座ったり/しゃがんだりがな/分からんと思うけど/俺にとっては/あぶねー/怖い/一緒にしゃがんだ/写真撮った/ノートのところに写真のっとる/子どもに手渡ししたところの	こども園/移動に関する消極的姿勢/懇願する/意図しない強制された動作/重心を上下する動作/理解されない/自分自身にとって/危険/恐怖を感じる/介助者と共に着座/その時の記録/子どもとの交流	他世代がいる場所/屋外活動への苦手意識/依頼/強制的な交流/自信の無い高負荷の動作/共感されない自身の不安/危険意識/介助付きの動作/いつでも想起できる媒体/子どもとの世代間交流	屋外活動への消極的意識/半強制化された活動/恐怖心を伴う高負荷動作/共感されない障がい感/子どもとの交流の回顧	
13		直接，（お互いの）顔が見えた方が子ども達も喜びますよね．確かに立ち座りは大変は大変だと思います．					
14	A 氏	だで，大変だな．しゃがむって．俺は自分の座椅子から降りて足を伸ばすのも多少苦労する．それだけでもえらい（大変）．今度立つときはよ．台とかがないと立ち上がれない．そういう障がいがあるもんで．でも，子どもは可愛いよ	大変だなしゃがむって/自分の椅子から足を伸ばすのも多少苦労する/それだけ/えらい大変/障がいがあるもんで/でも子どもは可愛い	困難なしゃがみ込み動作/馴染みの環境でも感じる困難性/とても大変/身体機能が低下した状態/それでも子どもに対しては実施できる行為	自信の無い高負荷の動作/習慣的動作への困難感/心身への負担感/心身機能の低下/心身機能を忘れさせる子どもの力	恐怖心を伴う高負荷動作/ADL 動作への困難感/残存機能を超越した行為	こどもが可愛いと感じる感覚について

【考察】

1．学生との交流がもたらす障がい者としての役割

野村[7]は，高齢者の生きがいとは生きるために見いだす意味や目的，価値であり，生きることに対する内省的で肯定的な感情の創設により実感されると定義している．また，青木[8]は高齢者の生きがい感に関しては，性別を問わず自己効力感，精神的健康度，心身的健康度，役割，年齢と有意に関連している．さらに，外山[9]は地域で暮らす高齢者が生活の場を施設に移した時には様々な落差がありその中でも最大のものは「役割の喪失」であると指摘している．高齢者のライフステージの変化は，個人の持つ役割にも変化をもたらし高齢期の内向的で閉鎖的な思考に繋がることが推測される．ましてや，障がいに伴う生活機能の低下は高齢期の役割の変化に多大な影響を及ぼすことは想像に容易い．

A 氏は脳血管障害後遺症により心身機能の低下を招いており活動や参加が制約されている状況である．病前は地方議員として活動されており，地域との交流が盛んであったため，社会的に「障がい者」として扱われる自分自身に負い目を感じ社会との関係を断っていた．上記の背景を持つ A 氏だが在宅復帰後に心身機能の維持向上を目的に利用を開始したデイケアでは，日常的に多くの学生と接する機会があり，学生との交流に対し A 氏なりの意義を持つ様子が伺える．A 氏は障がいを持つ当事者であるからこそ担える役割に価値を見いだし，教育者として学生と対峙している．A 氏はデイケアの被支援者という役割だけでなく，学生への支援者としての側面を持ち合わせ，その事に使命感を持ち生きがいに繋げていると考えられる．

2．子どもとの交流によって向上する生活機能

子どもと高齢者の世代間交流の影響は，高齢者に対し様々な成果をもたらす事が明らかにされており，心身機能に関してはうつ傾向の改善，身体の痛みの改善[10,11,12]活動や参加に関しては，外への交流の広がり[13]，外出機会の増加[12]，など交流の条件は異なるが ICF における生活機能の改善に一定の効果を示している．A 氏においても子どもとの交流を目的に非利き手を使用した創作活動や麻痺側上肢を含めた子どもとのコミュニケーション，子どもとの交流を目的とした外出機会の創設など，デイケアの利用だけでは生じない活動を行っている．これは子どもや子どもが居る環境がアフォーダンスとなりリハビリテーション行為を引き出したと捉えることができる．つまり，ICF における背景因子に対する働きかけによって生活機能を向上させる結果となっている．

また，子どもとの交流の成果として高齢者が喜びを感じる，元気になる，表情が豊かになるといった指摘がなされている[14,15]．A 氏においても子どもとの交流で麻痺のある上肢を使用し，周りの目を気にせず余計に手を振り返したという語りや，子どもの気持ちを想起しストローで玩具を作成した語りからは，子どもへの貢献意識だけではなく純粋な楽しい，嬉しいといった感情が生まれていることが推測される．この点について人類学の岩田[16]の「子どもらしさ」やそれを表す言葉としての「子ども性」についての言及しておきたい．詳細な議論は避けるが，岩田は自分というものは，子ども，大人，老人を包み込んだ全体人間なのではないかと述べている．子ども文化は全体人間のある時，あるところにおける自己表現なのだろうとしている[16, 17]．つまり，個人は年齢に関係なく子ども性を秘めており，子どもと対峙することによって高齢者の内なる子ども性を引き出す可能性を示

唆している．A 氏においても子どもとの交流は自身の子ども性を再獲得する瞬間であるとも考えられ,その結果として生き生きとした活動的な姿になったと解釈することもできる．

3．世代間交流が生み出す精神的安心感

A 氏にとってデイケアを利用する事と他世代との世代間交流を行う事は，病後に一度は自らの意思で断った社会との関係性を再構築する機会であると考えられる．障がい者として扱われない一人の人間としてデイケアで受け入れられるうちに，社会参加に意欲的となった．その後は自身の障がいと徐々に折り合いをつけ，障がい者という立場でなくては生じなかった他世代との交流に役割と楽しみを見出している．社会的役割を持つことは，高齢者の尊厳を高め自立に繋がる[18]との指摘もあり，A 氏においても ICF における環境因子や個人因子と言った背景因子が生活機能に対し肯定的に作用し健康状態を高めることに繋がっている．また，他者との関係の中でありのままの個人が認められることと，役に立っていると思えることが居場所の心理的条件である[19]と指摘されており，A 氏にとって世代間交流が実践されるデイケアは精神的安心感を与える居場所になっていると推測される．

【おわりに】

本研究では,デイケアで行われている世代間交流の意義を事例の語りから明らかにした．学生や子どもとの世代間交流は ICF における生活機能，背景因子のそれぞれに作用し健康状態を高める可能性が示唆された．

本研究の限界として，特定の地域の限られた対象者への質的研究であるため，結果の一般化は限定される．また，対象者が世代間交流に意欲的であった事や若年層との交流がリハビリテーション専門職を志す学生で臨床実習を兼ねていた事も留意すべき点である．

今後は，世代間交流に伴う高齢者の健康状態の変化をリハビリテーション領域以外の視点も加え分析し，その可能性を探求していきたい．

【謝辞】

本研究にご協力を頂いた A 氏，データ収集に協力いただいた皆様に深謝いたします．

【文献】

1）高齢社会対策体網：内閣府，https://www8.cAo.go.jp/kourei/meAsure/tAikou/index.html,（参照日:2022 年 11 月 20 日）
2）草野篤子:プロローグ インタージェネレーションの必要性. 草野篤子, 秋山博介（編）. 現代のエスプリ インタージェネレーション - コミュニティを育てる世代間交流，5-8，至文堂，東京，2004
3）糸井和佳，亀井智子，田髙悦子ほか : 地域における高齢者と子どもの世代間交流プログラムに関する効果的な介入と効果:文献レビュー．日本地域看護学会誌，15(1)，33-44，2012
4）黒岩亮子：日本における世代間交流の展開．社会福祉 59，85-95，2018

5) 惣万佳代子：あったか地域の大家族―富山型デイサービスの 14 年―．老年歯科医学，23(4)，379-383，2009
6) 大谷尚：SCAT による分析．大谷尚（編）．SCAT による質的データ分析．質的研究の考え方―研究方法論から SCAT による分析まで―，278-335，名古屋大学出版会，愛知，2019
7) 野村千文：「高齢者の生きがい」概念分析．日本看護学会誌，25(3)，61-66，2005
8) 青木邦男：在宅高齢者の性格特性，生きがい感関連要因及び生きがい感の関連性．山口県立大学学術情報，8，7-17，2015
9) 外山義：地域と施設の生活の「落差」．外山義．自宅ではない在宅-高齢者の生活空間論，17-34，医学書院，東京，2003
10) 小林美奈子，森田久美子：世代間交流を導入した高齢者うつ予防プログラムの開発-笑いヨガとタッピング・タッチの活用-．四日市看護医療大学紀要，10（1），1-10，2017
11) Kamei T，Itoi W，Kajii F, et.al.：Six month outcomes of An innovative weekly intergenerational day program with older Adults And school-Aged children in A Japanese urban community．Japan Journal of Nursing Science8（1）,95-107，2011
12) 亀井智子，糸井和佳，梶井文子ほか：都市部多世代交流型デイプログラム参加者の 12 ヵ月間の効果に関する縦断的検証 Mixed methods による高齢者の心の健康と世代間交流の変化に焦点を当てて．老年看護学，14（1），16-24，2010
13) 南部登志江：高齢者と子どもの世代間交流の意義-大阪府下および奈良県下の高齢者ケア施設職員と保育士へのインタビュー調査-．日本看護福祉学会誌，22（2），233-244，2017
14) 片岡万里，千浦淑子，森本恵ほか：世代間交流による痴呆老人の生活の質(QOL)に対する効果の研究．大和証券ヘルス財団研究業績集，25，168-173，2002
15) 田中直子，齋藤泰子：世代間交流施設における利用者評価-高齢者と子育て世代の母親の語りから-．武蔵野大学看護学研究所紀要，12，21-29，2018
16) 岩田慶治：子ども文化への視点．岩田慶治．子ども文化の現像-文化人類学的視点から，1-23，日本放送出版協会，東京，1985
17) 鵜野祐介：岩田慶治のみた「子どもの宇宙」-教育人類学からの「子ども性の探求」-．子ども社会研究，22，62-76，2016
18) 矢庭さゆり：要介護（支援）認定を受けた高齢者の他者への提供サポートが他者貢献感および生活満足度に与える影響．新見公立短期大学紀要，29，59-65，2008
19) 石本雄馬：青年期の居場所感が心理的適応，学校適応に与える影響．発達心理学研究，21，278-286，2010

[短報]

「清須市民げんき大学」のレクリエーション演習が参加高齢者に及ぼす影響
―KH Coder を用いたアンケート解析―

外倉　由之　加藤　真夕美　清水　一輝

愛知医療学院短期大学　リハビリテーション学科　作業療法学専攻

Effects of Recreational Exercises at “Kiyosu Shimin Genki Daigaku” on Participating Elderly People
- Questionnaire Analysis using KH Coder -

Tokura Yoshiyuki　Kato Mayumi　Shimizu Kazuki

【要旨】

本研究の目的は，一般介護予防事業である「清須市民げんき大学」の講座の一つであるレクリエーション演習に参加した高齢者へどのような影響をもたらしたか，その効果を検証することである．令和 2～4 年度の参加者を対象に，レクリエーション演習を実施した後の感想である自由記述内容を計量テキスト分析ソフト（KH Coder）で分析した．結果，頻出語リスト・共起ネットワークのつながりから，①交流の場のきっかけ，②回想を通じた生きがい感の充足，③自己の能力・叡知・経験を社会に活用できることを実感する機会となっていることが示唆された．

キーワード：げんき大学　高齢者　一般介護予防事業　計量的テキスト分析

【はじめに】

１．背景

現在わが国は，本格的な超高齢社会を迎えており，高齢者本人の力や住民相互の力も引き出して，生活の質の維持向上や健康増進，介護予防，生活支援（地域交流・社会参加など）を進めて行くことが要請されている[1)]．「高齢者社会対策大綱」[2)]においても，高齢者の社会参加活動促進のためには，世代間の連帯強化の必要性について言及しており，世代間交流は地域における高齢者の活躍の場の拡大及び地域の活性化につながっている．さらに，林ら[3)]は高齢者の老人力（知恵・経験・技）を学生に継承することは地域のソーシャルキャピタルを高める上でも重要であると述べている．しかし，現状として，朝倉ら[4)]は地域における住民間のつながりは弱体化し続け，異世代が共同して何かを成し遂げることが少なくなっていると危惧している．

従来，愛知医療学院短期大学（以下，本学）では愛知県清須市と，官学連携事業として一般介護予防事業である「清須市民げんき大学（以下，げんき大学）を開設し，げんき大学の担当教員は，参加される高齢者の方が介護予防の必要性を理解し，健やかで元気に過ごすことへの支援と，介護予防活動の担い手として参加できる人材育成を目指して，約１

年間で介護の予防の知識・実践を学ぶ高齢者向けの講座[5]を実践してきた．運動機能・認知機能の予防だけでなく，他者との相互関係を伴う活動である「交流」の要素も有しており，高齢者の社会参加を促す地域共生という視点も含まれている．

げんき大学のような一般介護予防・生活支援を目的の一つとした本活動は，継続的に行っていく事が重要であり，筆者も介護予防・生活支援の効果を期待して「レクリエーション演習」を開講してきた．しかし，効果については客観的に十分な評価がされておらず，今回レクリエーション演習後に自主的に参加した学生の事後レポート課題の自由記述内容に焦点をあてて，本研究に取り組むこととした．

2．げんき大学のレクリエーション演習について

本学は愛知県清須市と，官学連携事業として「げんき大学」を実施している．げんき大学は清須市の一般介護予防事業として平成 29 年度より開講し，令和 4 年度で第 6 期生を迎えている．

げんき大学は介護予防に特化した高齢者向けの大学であり，全 16 回で構成されている．1 回あたり 1 時間から 1 時間半程度の講座を 2 講座組み込み，「レクリエーション演習」として，本学作業療法学専攻学生（以下，OT 学生）とげんき大学の受講生（以下，げんき大学学生）との交流の場や介護予防を到達目標として実施している．交流の場については，交流を通じ，げんき大学学生が自主的に学び，自分自身に生かそうとする態度を意識してもらえるような場となることを主目標としている．

1）レクリエーション演習準備

レクリエーション演習の前半である 1 講座は，担当教員がげんき大学学生に演習の概要・目的を伝えた後，げんき大学学生 5～6 名が 1 グループとなり，主体的に集団レクリエーションの時間配分・内容等を各グループで話し合いながら計画立案・準備を行う．

計画する内容は，昔の遊びを伝えることを基本とし，受講生のグループごとに自身の特性を生かしたレクリエーション活動を行うといったものである．野村[6]によると，昔の遊びをグループで回想することは，地域在住高齢者の認知機能を改善させる有効な手段となる可能性が示唆されている．また，黒岩[7]は計画を立てる・人に教えるといった「役割」を与えられることに関して，生活の張りにもつながり，閉じこもりを予防すると述べているため，本演習内容は介護予防や生活支援に有効な可能性があると考えている．

げんき大学学生が企画した各グループのレクリエーション内容は，缶ぽっくり，折り紙，鍋敷き，あやとり，ダンス，くず入れ，ゴムとびなど多種多様であった（表 1）．

表 1　レクリエーション企画内容

実施年度	レクリエーションの企画内容
令和 2 年度	缶ぽっくり，折り紙，郡上踊り，歌，ゴムとび，割り出し鉄砲
令和 3 年度	鍋敷き，あやとり，くず入れ，棒取り，ダンス
令和 4 年度	ゴムとび，けんけんぱ，パチンコ，くず入れ，はんかち落とし

2）レクリエーション演習当日

後半の 1 講座は約 1 ヵ月後に実施．げんき大学学生を主体に，計画内容にそって，OT 学生に集団レクリエーションを約 30 分間実施する．

参加した OT 学生は本学 2 年生であり，令和 2 年度 34 名，令和 3 年度 24 名，令和 4 年度 35 名であった．各グループに対して，OT 学生の人数が均等となるよう配置している．

レクリエーション終了後，げんき大学学生は演習の振り返りを目的として，事後レポートの課題内容である「レクリエーション演習を実施した感想」と「OT 学生への励ましの言葉」を自由記述にて毎年作成している．

今回は，その「レクリエーション演習を実施した感想」から，演習を導入した講座の特徴や教育効果の分析を試みたので報告する．

【目的】

本研究は，げんき大学学生がレクリエーション演習参加した後の「レクリエーション演習を実施した感想」である自由記述内容を分析することで，レクリエーション演習がげんき大学学生にどのような影響をもたらしたか，その効果を検証することを目的とする．

【方法】

1．対象

令和 2～4 年度，げんき大学レクリエーション演習に参加した受講学生 62 名を対象に実施した．内訳は男性が合計 22 名（平均年齢 74.3±6.2），女性が合計 40 名（平均年齢 70.5±4.5）であった．

2．データ収集

レクリエーション演習終了後に，担当教員が受講学生に事後レポート課題（無記名）を配布した．そのうち，本研究では「レクリエーションを実施された感想をお書きください」といった設問に対する回答を利用した．

3．データ分析

以下の分析作業は，筆頭著者と共同著者の合計 3 名で相互に確認しながら実施した．

自由記述のデータは，テキストデータを整理または分析し，内容分析を行う方法である計量テキスト分析を用いて分析した．今回は，KH Coder(Ver. 3 Alpha. 17a)を用いた．

まず，データのクリーニングとしてテキスト欠損値やパソコンで読み込み不可能な表記

の削除，誤字脱字の修正を行った．同時に，短縮されている用語や同義語などを統一し，置換作業によって修正した．次に，分かち書きされたくない用語があれば，その語を強制的に切り出す作業を行い，分析用データとして整えた後，KH Coder に読み込ませた．テキスト計量分析では，頻出語の抽出，共起ネットワークの 2 つの分析を行った．

頻出語の上位語を確認すると，げんき大学学生の視点や関心がどこに向いているかが推察できる．また，頻出語だけでは対象学生の傾向を推察するのは不十分であるため，本研究では共起ネットワーク分析を合わせて実施した．共起とはテキストデータ内にある語と他の語が一緒に出現することをいい，共起ネットワーク分析の結果が視覚的に表示されるサブグラフは出現数の多い語ほど大きな円,強い共起関係ほど太い線で結ばれる.よって，サブグラフを読み解くことで頻出語だけでは読み解けない文脈の推察が可能になる．

今回の共起ネットワークにおける条件分析では，抽出語の最小出現回数を 6 回，集計単位は文とし，関連性の高い共起関係の算出には Jaccard 係数 0.3 以上を条件とした．

【結果】

1．事後レポート回収率

レクリエーション演習終了時に事後レポートをげんき大学学生全員に配布した．この事後レポートの提出は，げんき大学学生の自由意志であることを伝え，実施した．

そのうち，51 部の回収があり，全てを分析対象とした．回収率は 82%であった．

2．レクリエーション演習に参加した感想の分析結果

レクリエーション演習に参加して感じたことに関する自由記述の文章を,頻出語リスト,共起ネットワーク分析した結果を以下に示す.

1)単語の頻出語リスト

今回のアンケート内容について，頻出されていた頻出語の把握を試みた．

総抽出語数（使用）は 2764（1035）語，異なり語数（使用）は 581（457）語であった．使用というのは分析に使用する語の数を意味している．

出現回数の多い語は，「学生（58）」「楽しい（41）」「レクリエーション（17）」「時間（17）」「思い出す（12）」「グループ（11）」「若い（11）」「昔（11）」「素直（11）」等であった．

レクリエーション演習を実施された感想の自由記述に記載された頻出上位 30 語を示したのが表 2 である．

2) 共起ネットワーク分析

共起ネットワークを用いて,抽出語間の共起性の強さをネットワーク図で表した(図 1)．円の大きさは言葉の頻度の多さを示し,円をつなぐ線の距離は関連性の深さを示している．バルブロットの大きさは「学生」「楽しい」が大きく，次いで「レクリエーション」であった．

また，サブグラフの処理を行うことで，互いに強く共起している語でのグループ分けを行うことができ，本研究ではレクリエーションを中心に 5 つのサブグラフが示された．

表 2　レクリエーション演習終了後のレクリエーションを実施された感想の自由記述に記載された頻出上位 30 語

順位	抽出語	出現回数	順位	抽出語	出現回数
1	学生	58	13	遊ぶ	7
2	楽しい	41	17	過ごす	6
3	レクリエーション	19	17	考える	6
4	時間	17	17	子供	6
5	思い出す	12	20	コミュニケーション	5
5	遊び	12	20	歌	5
7	グループ	11	20	歌う	5
7	若い	11	20	皆さん	5
7	昔	11	20	教える	5
7	素直	11	20	見る	5
11	元気	9	20	折り紙	5
12	作る	8	20	早い	5
13	一緒	7	20	体	5
13	人	7	29	ゴムとび	4
13	聞く	7	29	楽しむ	4

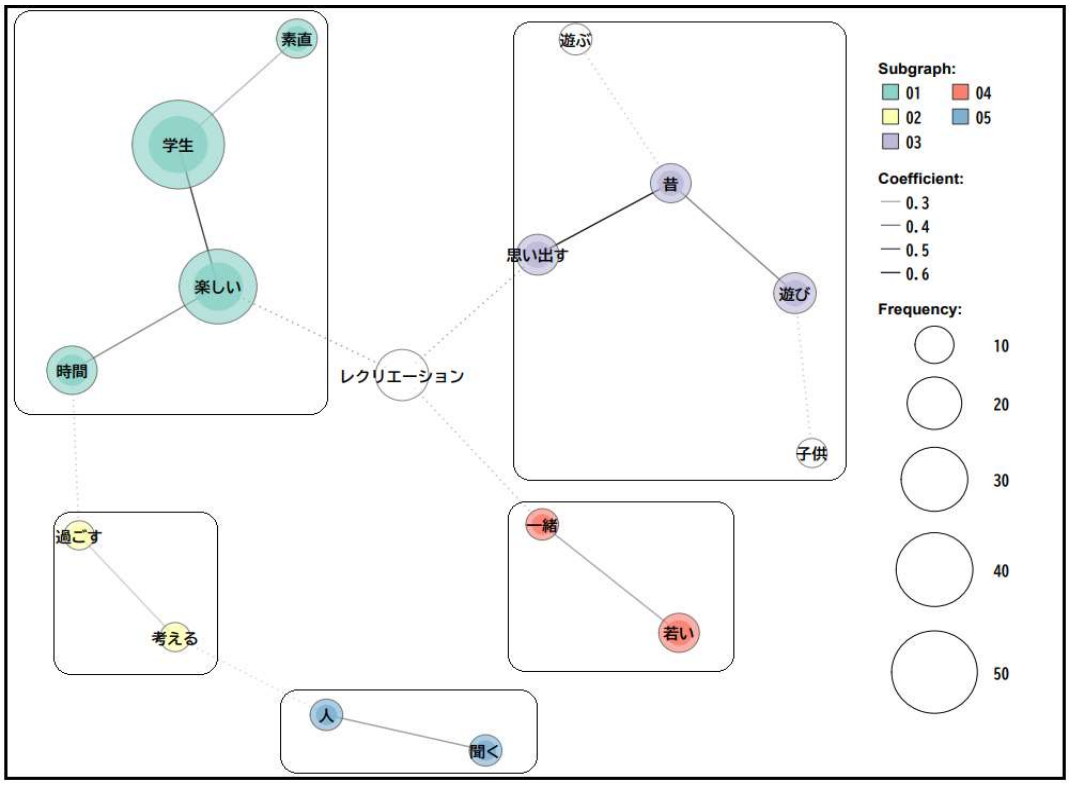

図 1 レクリエーション演習を実施された感想の自由記述の共起ネットワーク分析結果

【考察】

関連語検索をしながら，記述された文章の意味を解釈し，実施したレクリエーション演習の感想を整理した．以下，自由記述の「」はげんき大学学生の自由記述を抜粋したものである．

1．レクリエーション演習を実施して感じたこと

1）交流の場のきっかけ

頻出語として「学生（1 位）」「楽しい（2 位）」「レクリエーション（3 位）」「時間（4 位）」といった語が多く，共起ネットワーク分析でも「学生」「楽しい」「時間」「素直」といったつながりがみられた．また，自由記述を見ると「若い学生に教えるのは難しいと思っていたが、学生が素直でとても楽しかったです」「話をしていると素直な子たちであった、私達も一日楽しく若返った気持ちでした」「学生と歌でつながれて良かった」「楽しい時間で、互いに助け合ったり相手を思いやる気持ちを感じました」等の記述があった．

現代の世代間交流の背景として，社会保障制度は世代間の支え合いやつながりを基底として構築されているが，他世代と分断され自分の世代だけで生活することが常態化している[8]．それゆえ，若者に対してのイメージを持ちにくく，他世代が共同して何かを成し遂げることが少なくなっている．この様な中，参加したげんき大学学生が，交流した OT 学生の印象を知ることができたことや楽しく交流できている要素につながった演習の取り組みは，異世代間のつながりを提供する要素を持つと考えられた．

高齢者が世代や分野を超えて，人と人，人と資源を気軽に楽しみながら活用できる交流の場は，地域包括ケアシステムの実現や地域共生社会を推進していくための最も重要な地域資源である．松本ら[9]は，趣味や娯楽を通した「楽しさ」などの情緒的交流が高齢者の社会参加の促進要因であると述べている．今回のアンケート結果からも，レクリエーション演習の参加は交流のきっかけとなり「社会的役割」の一つである社会参加への構築を促進させるという役割を持つことが示唆された．

2）昔を思い出す回想の効果

次に，頻出語の「思い出す（5 位）「遊び（5 位）」「グループ（7 位）」「昔（7 位）」といった語は，共起ネットワーク分析でも「昔」「思い出す」「遊び」といったつながりがみられた．自由記述では，「昔の歌を歌う、聞くと元気になったり、自信をもてたり、慰めになる」「昔を思い出し、童心にかえったみたいで良い思い出ができた」「昔の遊びをグループで話し合っている時は、一瞬童にかえった気がした、材料の調達をしている時は会社勤めを思い出した」「グループで必死に覚え、学生さんに紹介するときは楽しかった」等があり，レクリエーション演習を体験することで，普段思い出す機会が少ない昔の懐かしい思い出や記憶を OT 学生とのレクリエーション演習で思い起こし自信を持った，あるいはレクリエーション後も OT 学生と楽しめたといった肯定的な捉え方をされていた．

木村ら[10]によると一般的に高齢期は，心理的・社会的・精神的側面から生きがいを喪失しやすい時期であるが，一方で高齢者は生きがいを喪失しやすいものの，再獲得できる能

力を持っているとし，高齢者の生きがいの特徴として，過去の生きがいを通して現状の生きがいを実感し，時間の流れという文脈の中で現在の生きがいを捉えていると言われている．そして，レクリエーション演習のように昔を思い出すといった回想の効果について，野村ら [11] は，昔を思い出す機会は過去を振り返り，思い出を促すことは自我の統合の促進，抑うつの軽減，自尊感情の回復などの心理的効果があると指摘している．そのため，レクリエーション演習における昔の遊びを伝えるという過程において，普段は機会が少ない昔の遊びを思い出し，OT 学生に伝え，人に役立つ自分を発見できる成功体験は，自己の人生回顧を促し，生きがい感に影響を与える役割を持つことが示唆された．

3）高齢者の能力，叡智，経験の社会的活用

最後に，頻出語リスト上位語や共起ネットワークでつながりがあった「過ごす」「考える」や「人」「聞く」，「一緒」「若い」の 3 つのサブグラフにおいてもレクリエーションと関連性があった．自由記述では「若い人に時代によって異なる遊びを伝えられた事は、その時々の文化に触れ合うことは意味がある」「チームを組み、考え、実行して移すことを過ごすことは、面白く有効であったと思う」「初対面だが、遊びを通じて打ち解けることができ、有意義に過ごすことができた」「自分たちで何をやるか考えて、若い学生と実施して、十分認知症予防になった」「考えて人に教えるのは難しさを感じていた学生と早く打ち解け、安心した」「年代の差はありますが、相互理解のためには、会話を聞き、自分から話しかけることが大事だと思った」「時間配分、折り紙の彩り、配置、文字への思いを考え、事前準備した成果が出た。友人や知人にも教えたい」などがあった．げんき大学学生も演習発表当日に向けて役割分担し，事前準備や全員で昔の遊びを継承するといった過程において，主体的に取り組む行動が終始みられた．これらの主体的に取り組む行動は，草野 [12] が世代間交流の利点としてあげている「高齢者の能力，叡智，経験の社会的活用」「歴史的，文化的交流と伝承」「生活の質を高める」「交流を通じて地域社会の統合」などといった利点にあてはまっていると考えられた．

また，主体的に実践し，OT 学生に話しかけることに気づきを得た点は重要である．厚生労働省 [13] も自分の暮らす地域をより良くしたいという地域住民の主体性に基づいて，他人事ではなく我が事として行われてこそ，参加する人の暮らしの豊かさを高めることができ，持続していくと提言している．今後も，自分の能力を主体的に他者へ貢献でき，自信をつけていくことが社会参加活動促進につながるため，主体性が発揮できる講座を考えていくことが重要と思われる．

以上の内容から，レクリエーション演習の到達目標である交流といった生活支援や介護予防に対して，少なからず達成できていることが客観的に示されたと考えられる．さらに，総務省 [14] が提言している「域学連携」では大学生と大学教員が地域に入ることは，地域の住民や NPO 等とともに，地域の課題解決又は地域づくりの継続的な取り組み，地域の活性化及び地域の人材育成に寄与すると言われている．本学のげんき大学における様々な取り組みも社会貢献機能を有しており，地域社会と大学をつなぐ生涯学習の効果的な資源であることが示唆された．

【研究の課題】

本研究では，げんき大学学生に焦点を当て，レクリエーション演習での効果を検証した．交流をしていく中で，円滑な対人関係を築く構成要因の一つとして，大坊[15]は対人認知を挙げている．実際，OT 学生においては，げんき大学学生とレクリエーション演習といった作業を共有することで，高齢者のステレオタイプとは異なる個別的な特徴を抱くといった対人認知の印象形成で質的に変化した結果が，加藤ら[16]の研究により得られている．

そのため，今後は相互交流の効果をより検討するよう，げんき大学学生の対人認知の変容にも視点をおいた検証を進めていきたい．

【おわりに】

本研究では，官学連携事業として一般介護予防事業である「げんき大学」の講座であるレクリエーション演習について，事後レポート課題内容である「レクリエーションを実施した感想」について自由記述により記入してもらった．得られたテキスト文を KH Coder を用いて頻出語の抽出，共起ネットワークの 2 つのテキスト計量分析し，客観的な効果を検証した．

その結果，頻出語リスト・共起ネットワークのつながりから，①高齢者同士や学生を含めた交流のきっかけ，②回想を通じた生きがい感の充足，③自己の能力・叡知・経験を社会に活用できる効果などを実感している機会となっていることが示唆された．

わが国は超高齢社会を向かえており，様々な高齢化問題を抱えている．それらの解決方法の一つであるレクリエーション支援は重要な社会資源であり，今回のレクリエーション演習においても一定の効果がみられており，地域高齢者だけでなく OT 学生にとっても貴重な体験であった．今後も継続的に実施できるよう本研究の結果を参考に，講座内容の改善へつなげていきたい．

【謝辞】

本研究の取り組みのため，レクリエーション演習課題のレポート内容を提供してくださったげんき大学学生の皆様，研究を進めるにあたり，ご多忙の中レクリエーション演習にご協力をいただいたげんき大学関連職員の皆様に心より感謝を申し上げます．

【文献】

1) 厚生労働省：これからの地域づくり戦略　集い．互い．知恵を出し合い 3 部作 https://www.mhlw.go.jp/content/12601000/000490353.pdf（参照日 2022.12.15）
2) 内閣府：高齢社会対策大綱　https://www8.cao.go.jp（参照日 2022.12.18）
3) 林裕栄，武田美津代，張平平，他：地域高齢者と看護学生の世代間交流に関する研究．保健医福祉科学，第 7 号，59-65，2017.
4) 朝倉和子，山岡義卓，西口 守：自立支援特化型高齢者デイサービスにおけるレクリエーションプログラムの再考 - 大学生との世代間交流の効果に着目して - 東京家政学院大学紀要，第 54 号，1-8，2014.
5) 加藤真弓，臼井晴信，山下英美，他：清須市民げんき大学が高齢者の身体機能と食品摂取多様性スコアに及ぼす影響．愛知医療学院短期大学紀要，第 12 号，52-58，2021.

6) 野村信威：在宅高齢者におけるグループ回想法の認知症予防効果．高齢者のケアと行動科学，第 23 巻，11-21，2018.
7) 黒岩亮子：日本における世代間交流の展開．社会福祉，第 59 号，85-95，2018.
8) 吉村遼子：大人への移行における他世代交流の意義 - 当別町における社会福祉法人ゆうゆうの事例を参考に - ．社会教育研究，第 34 巻，63-73，2016.
9) 松本弘美，藤井麻帆，福永まゆみ：高齢者の社会参加の要因となる交流に関する文献レビュー．鳥取短期大学研究紀要，第 81 号，21-29，2020.
10) 木村裕美，西尾美登里，久木原博子，他：地域で生活する虚弱高齢者の生きがい感の実態と影響する要因．健康支援，第 21 号，1 巻，39-44，2019.
11) 野村信威，橋本宰：地域在住高齢者に対するグループ回想法の試み．心理学研究，第 77 巻，第 1 号，32-39，2006.
12) 草野篤子：世代間交流効果 - 人間発達と共生社会づくりの視点から - ．三学出版，1-17，2009.
13) 厚生労働省：「地域共生社会」の実現に向けて https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/0000184346.html（参照日 2023. 1.15）
14) 総務省：「域学連携」地域づくり活動 https://www.soumu.go.jp/main_soski/jichi_gyousei/cgyousei/ikigakurenkei.html（参照日 2023. 1.18）
15) 大坊郁夫：対人コミュニケーションの社会性．対人社会心理学研究，第 1 号，1-16，2001.
16) 加藤真夕美，清水一輝，外倉由之：作業療法学生の高齢者に対するステレオタイプな印象は作業の共有によってどのように変化するか―連続体モデルに基づいた対人認知の視点から―．愛知医療学院短期大学紀要，第 13 号，33-42，2022.

[活動報告等]

高齢者大学の卒業生が社会で活躍する場を広げる支援の試み

加藤　真夕美　清水　一輝　外倉　由之

愛知医療学院短期大学　リハビリテーション学科　作業療法学専攻

Attempts to support expanding opportunities for graduates of the university for the elderly to be active in society

Kato Mayumi　Shimizu Kazuki　Tokura Yoshiyuki

【要旨】

介護予防普及事業の一環である「清須市民げんき大学」を卒業した高齢者に対し，作業療法を学ぶ学生の講義に講義ボランティアとして協力してもらう取り組みを試みた．その結果，6 名の卒業生の協力を得ることができた．性別の内訳は，男性 4 名，女性 2 名であった．また応募の方法は，当初予定していた方法での連絡は 2 名に留まり，他は同窓会関連事業での個別勧誘などを通して予定数の獲得に至った．60 分間のインタビュー体験は，作業療法学生の準備した質問に基づいて進められたが，徐々に講義ボランティアの回答内容が豊かになり，予定していた日常生活活動の枠を超え，過去，現在，未来の繋がりの中での詳細な生活像へと広がっていった．作業療法学生がお礼の色紙を作成し手渡しするなど，事後の交流も実現することができた．本取り組みを通して，作業療法士養成校として高齢者の社会参加に資する取り組みができるかについての可能性と課題が示唆された．

キーワード：高齢者大学　介護予防普及事業　社会参加　作業療法

【はじめに】

愛知医療学院短期大学（以下，本学）では愛知県清須市との官学連携事業として高齢者大学である「清須市民げんき大学（以下，げんき大学)」を実施している．げんき大学は，清須市の一般介護予防事業（介護予防普及事業）として平成 29 年度より開講し，令和 4 年度で第 6 期生を迎えた．げんき大学設立の趣旨は，「健康や介護予防に関する知識を広げ，運動を通して日常的に健康づくりを進めるとともに，新しい出会いや発見，感動を分かち合えること」を目指すこと（以上，げんき大学入学案内より抜粋)」であり，将来的には地域活動の中心的役割を担える人材の育成を目標に掲げている．そのため，本学としてげんき大学卒業生の社会参加をいかに拡大し定着する支援ができるかを模索している段階である．

高齢者の社会参加の重要性に関しては，近年作業療法分野でも研究が盛んである．木下ら [1] は，福岡県在住の集いの場に参加した地域在住高齢者 298 名を対象に行った質問紙調査で，主観的幸福感は活動の参加状況と年齢に関係していることを明らかにした．「価値のある活動の参加状況が SWB（著者注：主観的幸福感）の充足に貢献している可能性」が示唆されたと述べている．また佐藤ら [2] は，中国地方の居宅サービス事業所を利用する

65 歳以上の要介護高齢者 335 名に対して行った面接式および自己評定式の尺度を用いた役割遂行と環境要因，健康関連 QOL（HRQOL）に関する調査において，HRQOL が身体機能よりも環境要因に強く影響され，更に役割遂行の関与が大きいことを明らかにしており,「役割遂行の満足度が高まることを意図した環境支援が重要である」と述べている．研究の対象者層は異なるが，社会参加が生活の質や主観的幸福感を高めることに重要な要素であるとの見解では一致している．

一方で武田ら[3]は，東京都に在住し地域の自主活動に参加する 65 歳以上の高齢者 146 名を対象に，作業遂行や生活満足度などに関する調査を通して，プレフレイル（フレイルの前段階）の高齢者は，ロバスト（健常者）の高齢者と比べ，生産的活動とセルフ・ケアの得点が有意に低いことを明らかにした．武田らの示した生産的活動とは，主に家事やボランティアなど家庭内や社会的な役割を指し,「日々の ADL や IADL，役割活動といった作業への参加状況が良好であるかがプレフレイルの状態と関連」していると結論付けた．このように研究者によって社会参加の範囲は異なるが，社会参加が主観的側面だけでなく心身の健康にも影響しており，社会参加の機会を増やすことが介護予防に繋がることは現代社会では一般的に認識されている．

卒業生の社会参加を広げる支援の一つの試みとして，本学の作業療法学専攻では令和 3 年度より，正規の授業にボランティアとして協力してもらう機会を設けている．令和 3 年度は 1 科目で試行し，令和 4 年度より 2 科目に増やして実施している．本稿は，そのうちの 1 科目での取り組みを紹介し，高齢者大学の卒業生が社会参加できる場の選択肢を広げる支援を,作業療法士養成校としての本学がいかに担えるかを検討するものである.なお,本稿で掲載した写真は，本学の取り組みを紹介する Social Networking Service（SNS）を含めて，公表することについて講義ボランティアと作業療法学生（以下，OT 学生）一人一人からその都度口頭にて同意を得ている．また本稿に掲載するにあたって，個人が特定できないよう画像に一部加工を施している．

【方法】

1．講義ボランティアの募集方法

令和 4 年 3 月までに卒業したげんき大学第 1 期生から第 5 期生，合計 119 名のうち，げんき大学同窓会関連の文書受け取りを辞退していない人に対し，同窓会関連の文書を郵送する際に,「短大講義ボランティアの案内」として募集案内の用紙を同封した．募集案内には授業日時，授業科目の概要，対象専攻と人数を記した上で,「お手伝い頂きたい内容」として「学生が準備した内容に沿ってお尋ねしますので，それに対してお答えいただきます.『皆様が日常的にしておられる活動について，工夫していること，こだわり，困っていること』についてお尋ねする予定です.」等と記した．

締め切りには約 1 ヶ月の期間を設け，希望の受付は電話連絡，もしくはメール送信のいずれかとした．

2．講義ボランティアを取り入れた授業と対象学生の概要

対象科目は,「日常生活作業学実習」である．本学作業療法学専攻 2 年次の前期に，15 コマ計 30 時間が配置されている．このうちの 1 コマ（90 分間）を，講義ボランティアに

協力を得る時間とした．以下，この時間を「インタビュー体験」と称する．インタビュー体験は，正規の授業時間枠内で設定した．

この時間の OT 学生としての目的は，「作業療法士として対象者から，日常生活活動（Activities of Daily Living，以下 ADL）の評価に関していかに有益な情報を引き出せるか，を体験的に学ぶ」ことであるとレジュメと口頭にて提示した．準備および当日の流れについては後述する．

なお，「日常生活作業学実習」に履修登録している OT 学生は 36 名であり，全員がインタビュー体験に参加する予定であった．

【結果】

1．インタビュー体験当日までの準備

1) 講義ボランティアの獲得状況と事前の打ち合わせ

講義ボランティアは，合計 6 名の協力を得ることができた．性別の内訳は，男性 4 名，女性 2 名であった．げんき大学卒業からの期間は，卒後 1 年目が 2 名（33%），3 年目が 3 名（50%），4 年目が 1 名（17%）であった（図 1）．また，応募の方法は，当初予定していたメールでの応募は 2 名（33%）であり，その応募者による勧誘が 1 名（17%），同窓会関連事業で改めて周知したことによる直接申し込みが 1 名（17%），同窓会員で構成されるサークル活動グループでの直接勧誘が 2 名（33%）であった（図 2）．

応募者には科目担当教員がメールや電話等で当日の集合時間や場所，段取り，話してほしいことなどを事前に伝えた．

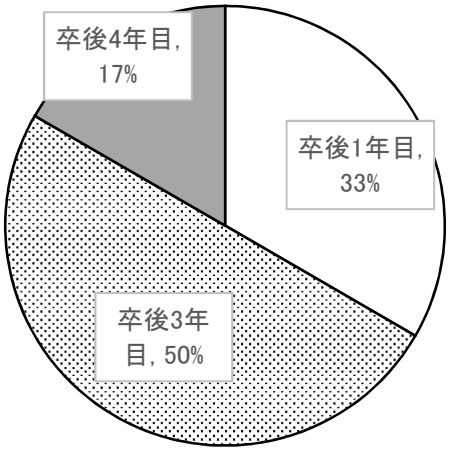

図 1　講義ボランティアのげんき大学卒業からの経過年数の内訳

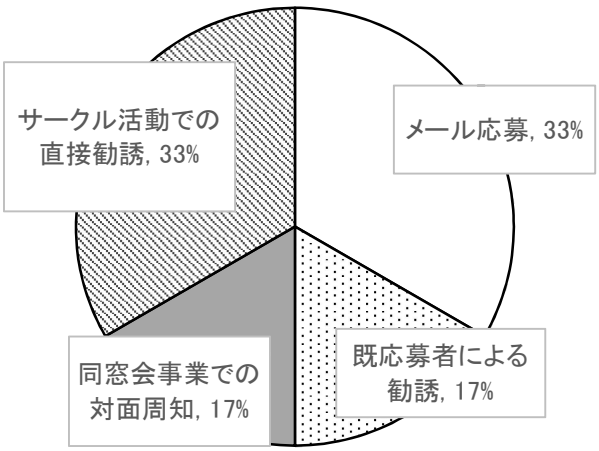

図 2　講義ボランティアの応募方法の内訳

2) OT 学生の，インタビュー体験当日までの準備

インタビュー体験の 1 週間前の授業では，OT 学生に目的や方法など授業の概要を説明した後，OT 学生を 6 名ずつのグループに割り振った．グループは，性比が偏らないこと，

普段の授業の様子などから活発に意見交換ができる学生や寡黙な学生が偏らないことなどを念頭に，科目担当者である筆頭著者が割り振った．

その後 OT 学生には 1 コマ（90 分間）をかけて，講義ボランティアに対して何を聴取するか，どの順番で聴取するか，役割分担はどうするかを話し合ってもらった．その内容は，レポートにまとめ提出させた上で，口頭にてフィードバックした．表 1 は，OT 学生が予定していたインタビュー内容で複数のグループから挙げられていたものの一例である．

なお OT 学生に講義ボランティアの苗字（カタカナで表記して提示）と性別を伝えたのは，インタビュー体験の 3 日前であった．新型コロナウイルス感染症（以下，COVID-19）の影響により，直前までグループを確定させるのは難しいと判断した結果である．

表 1　OT 学生が予定していたインタビュー内容の一例

趣味，最近楽しかったこと，コロナ禍での変化，生活の中のこだわりや工夫，一日のスケジュールやルーティン，過去に参加していた地域活動や現在参加しているコミュニティ，仕事を辞めて変わったこと，ストレスの発散方法，日常生活で困っていることや対処方法，げんき大学になぜ入ったのか，健康面で気を付けていること，健康維持のために行っていること，若いうちにやっておけばよかったと思うこと，など

2．インタビュー体験当日の記録

1）参加人数とグループ編成

講義ボランティアは予定通り 6 名が参加した．OT 学生は COVID-19 などの影響により 6 名が欠席し，30 名であった．予定通り 6 グループとし，各グループの構成は，講義ボランティア 1 名と，OT 学生 4～6 名となった．

2）タイムスケジュール

表 2 は，OT 学生が講義ボランティアを玄関で出迎える時点を零（0）分としたときのタイムスケジュールである．当日は予定通りに進捗した．

表 2　当日のタイムスケジュール

0	：正面玄関で OT 学生が講義ボランティアを出迎え，会場に誘導
15	：互いに自己紹介
25	：インタビュー開始
65	：全員で感想を述べあう
75	：終了，解散

数字は時間の経過を示したもの（単位：分）

3) インタビュー時の様子

全員が着席した際には，お互いに挨拶を交わすものの，講義ボランティアと OT 学生の双方とも緊張の面持ちであった．自己紹介から始まり，OT 学生が用意した質問をリストに沿って読み上げた．司会者と書記は固定し，質問者は全員で回していくというスタイルで進んでいった．初めは一対一の質疑応答のような形であったが，OT 学生の 1 つの質問に対して，講義ボランティアが話を広げて回答するなど徐々に回答時間が長くなっていくと，OT 学生の質問もその回答の補足説明を求めるようなものになり，予定していた流れからは外れるも，より深いインタビュー内容へと変遷していった．話が一区切りつくと，また予定していた質問に戻り更に話題が広がるという様子で，40 分間のインタビュー時間が徐々に濃密になっていった．

講義ボランティアの話は，OT 学生の質問をきかっけに，自身がどのような職歴や生活歴を辿ってきたかの思い出話や，現在の趣味活動や所属グループでのエピソードや今後挑戦してみたいことなどについて，当初予定していた ADL の枠を超え，過去，現在，未来の繋がりの中での詳細な生活像へと広がっていった．あるグループでは講義ボランティアが，自身の入院をきっかけに感じているリハビリテーションスタッフへ求める姿を語っていた．またあるグループでは，視聴覚の老化について若者に知ってほしいと，講義ボランティアが事前に準備してきた資料を OT 学生に配布し，ミニレクチャーをしていた．また，欠席者がいた都合により講義ボランティアも OT 学生も全員女性となったグループは，好みの芸能人や恋愛などの話でも盛り上がり，「女子会」さながらの様相を呈していた．

OT 学生が予定していたインタビュー内容は，どのグループも似通っていたが，出会いから 75 分後の会場は，6 グループすべてで独自の異なった体験が繰り広げられていた．図 3 は，インタビュー時の様子の写真である．

図 3　インタビュー時の様子

3．インタビュー体験後の記録

1) OT 学生への課題

OT 学生には事後課題として，振り返りレポート作成と，講義ボランティアへのお礼の

色紙作りを指示した．振り返りレポートには，以下の項目を記すよう求めた．

①インタビュー対象者の評価結果と分析

a．評価結果（対象者がどのような生活をされているのかがわかるよう，入手した情報をナラティブに記述する．グループで文章を共有せず，自分の言葉で表す.）

b．分析（なぜ a のような生活をされているのか，行動特性や性格傾向，背景因子などから考察する）

②インタビュー体験の振り返り

a．自身のどのような言動が，対象者のどのような反応・返答を引き出したかと，その理由を考察する．

b．対象者から思ったような反応や返答が引き出せなかった場合，それは自身のどのような言動が原因だったのか，またその理由を考察する．

③感想とこれからの目標

また，お礼の色紙には「講義ボランティアの『その人らしさ』『大切にしているもの』を図や簡易な文章を交えて，視覚的に分かりやすく表現する」ことを求めた．更に一人一人感想を記すようにと指示した．材料や道具などは教員が準備した．

2）講義ボランティアと OT 学生との再会

OT 学生が作成したお礼の色紙を，講義ボランティアに贈呈した．方法は，講義ボランティアが来学したときに合わせて OT 学生が直接手渡したものが 4 件，教員が代表して講義ボランティアの自宅に郵送したものが 2 件であった．該当者には郵送することを，事前に教員から電話で伝えておいた．

直接手渡しできたグループは，講義ボランティアと OT 学生皆が笑顔になり，久々の再会を喜んでいた．手渡された色紙を見た講義ボランティアからは，感謝の気持ちと近況などが伝えられた．一方で郵送した講義ボランティアからは，丁寧なメールでのお礼が届いた．その内容を OT 学生に伝えて良いかとの意向を講義ボランティアに確認した上で，教員が OT 学生に伝えた．図 4 は，OT 学生が作成した色紙の一部である．

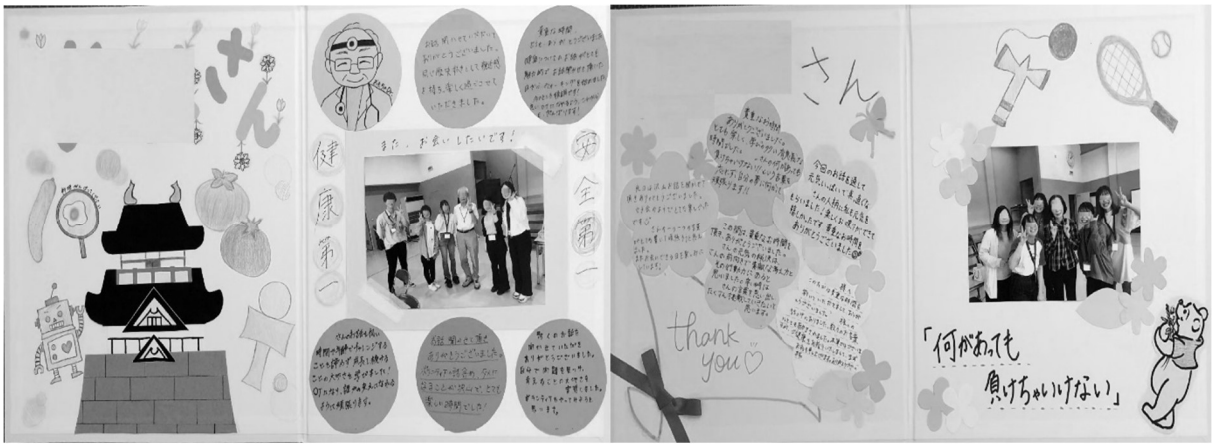

図 4　OT 学生が講義ボランティアに向けて作成した色紙

3) げんき大学同窓会会報誌への寄稿

げんき大学同窓会の会報部員より要望を受け，会報誌「げんき広場」へ寄稿した．げんき広場は令和 3 年度に創刊し，今年度で 2 号目の発刊である．「げんき大学同窓生が活躍」との見出しで一面を飾ることになった（図 5）．写真は個人が特定されないように，実際の紙面を一部加工している．

げんき広場

第２号

【発行】　2022 年 11 月
清須市民げんき大学同窓会
清須市一場 519 番地
愛知医療学院短期大学地域連携室
会報部　☎052-409-3311

「げんき大学」同窓生が活躍

５月２７日（金）、げんき大学同窓生の方６名にお越しいただき、短大の授業をお手伝いいただきました。作業療法学専攻の２年生を対象とした「日常生活作業学実習」という授業の一環で、短大の学生が同窓生の方に質問して、お話を伺うという試みです。作業療法士の卵として、対象者の方から大切なお話を伺う技術を磨くための貴重な機会となりました。日々の生活で大切にされていることや、楽しみにされていること、頑張っておられることなど、数えきれないほどのエピソードをお伺いすることができ、６０分間があっという間でした。

【短大講義ボランティア】

年代の異なる方からお話を伺う機会が少ない短大の学生は、始めは

図 5　げんき大学同窓会広報の紙面の一部

【まとめと考察】

1．インタビュー体験と講義ボランティア活用の意義

本学の正規の授業を利用して，げんき大学の卒業生を講義ボランティアとして迎え，OT 学生によるインタビュー体験を行った．インタビュー体験や講義ボランティア活用の意義については，今後の課題とする．ただし講義ボランティアから，インタビュー体験当日や事後に感想を聞いた限りでは，授業の時間をとても充実した思いで過ごし，各々の意味づけを見出しつつ役割を終えたようである．

高木ら [4] は広島県在住の 65 歳以上の高齢者 20 名を対象とした作業と満足度に関する半構造化面接と日記の分析を通して，高齢者の一日の満足度に影響を与える作業経験から，「つながり－隔たり，承認－否定，貢献－迷惑，努力－怠惰，楽しさ－退屈，進展－後退，上出来－不出来，獲得－喪失，回復－減退という 9 つのテーマ」が内在されていることを明らかにした．今回，講義ボランティアは，医療従事者を目指す若者と触れ合い，自身の体験を若者たちの勉強のために伝えるという役割を担っていた．特に「つながり」（他者との交流を通じて，他者とのつながりや愛情を感じる），「貢献」（他者や環境に好影響を与え，

自分が役に立ったと感じる),「楽しさ」(好きなことや興味のあることをして,五感を使い,楽しさや面白さを感じる）は，講義ボランティアの高齢者が抱きやすかった要素と考えられる．今後はこれらの要素を軸に，意味づけを分析し整理していきたい．

2．講義ボランティアの募集について

講義ボランティアの募集については，当初予定していた電話やメールでの応募者は 2 名のみ（図 2）であった．げんき大学関連の他のボランティア募集においても前年度に比べ応募者が低調であったため，他職員と検討したところ，応募方法の違いが大きな要因ではないかとの結論に至った．前年度は電話やメールではなく，同封した葉書に希望を記して返送する形式であり，高齢者が意思表示しやすかったのではないかと考えられた．このことについても，高齢者の応答行動などを精査し，より希望者を拾い上げやすい方法を検討していきたい．

一方で，6 名中 4 名が男性の高齢者であった．社会参加に関する男性の傾向について，中嶋ら[5]は，北海道内の同一地域にある通所系サービスを利用している男性 10 名に対する作業についての質問紙および半構造化面接を通して，対象者が価値を置く作業には大きく 2 つの特徴があることを明らかにした．「見える達成を実感できる作業」と「社会的に意味あることが確認できる作業」である．すなわち前者は「作業の達成状況や成果を，数値や作品など明確な形で確認できる作業」であり，後者は「作業の社会的意味や作業を行うことで自分が社会に所属していることを確認できる作業」である．今回のボランティア内容は，先述した通り，医療従事者を目指す若者に対して，若者のために自身の体験を伝えるというものであり，後者の「社会的に意味あることが確認できる作業」に該当するために男性が参加しやすかったものと考えられる．募集に際しては，性差による案内の仕方にも工夫の余地があることが示唆された．更に図 1 に関連して，げんき大学卒業後の経過年数が，本学との関りの程度にどのように影響していくのか，長期的に見ていく必要がある．

なお今回の取り組みが同窓会会報誌（図 5）に掲載されたことは，本学がインタビュー体験において講義ボランティアにどのような役割を求めているかを周知できる機会となった．今後も同窓会との連携を模索していきたい．

また今回の参加者はすべて，日々様々な地域活動で活躍していたり，げんき大学同窓会活動に積極的に参加している卒業生ばかりであった．今回の経験を基礎として，様々な背景を持つ卒業生の社会参加の場をいかに広げていく支援が可能か，更に知見を重ねていくこととする．

【謝辞】

様々な社会活動をされている中，インタビュー体験にご協力いただき本学の授業に笑顔の花を咲かせてくださった講義ボランティアの皆様に，心より感謝いたします．

【文献】

1）木下亮平，長城晃一，石附智奈美ほか：地域在住高齢者における主観的幸福感と活動の参加状況および基本属性の関連．作業療法 40(1)，34-41，2021

2) 佐藤裕和，藪脇健司，佐野伸之：地域在住要介護高齢者の役割遂行と環境要因が健康関連 QOL に与える影響－身体機能の影響を含む包括的検討－. 作業療法 39(1), 60-69, 2020
3) 武田将，谷村厚子：作業参加とプレフレイル及び心理社会的状態の関連構造の検討－地域で自主活動に参加する高齢者を対象とした分析－. 作業療法 40(3), 300-310, 2021
4) 高木雅之，岡崎ななみ，宮脇佳奈ほか：地域在住高齢者の日々の満足度に影響を与える作業経験に関する探究的研究．作業療法 38(6)，674-682，2019
5) 中嶋克行，坂上真理，坂上哲可ほか：地域に住むよう支援高齢男性が価値を置く作業の特徴に関する質的研究．作業療法 38(3)，266-276，2019

[学生研究]

≪卒業研究論文　第 13 巻　令和四年度≫

［理学療法学専攻］

ラダートレーニングがバランス能力に及ぼす影響
浅井　夏希　（指導教員：濵田　光佑）

長期的なストレッチングが投球動作に及ぼす影響
安達　文哉，矢頭　龍　（指導教員：山田　南欧美）

運動時の不織布マスク着用による身体への影響
阿部　育良　（指導教員：臼井　晴信）

運動後の休憩時間における姿勢が疲労回復過程に与える影響
荒武　茉耶　（指導教員：臼井　晴信）

運動介入前後の睡眠時の自律神経の変化
石丸　星来　（指導教員：臼井　晴信）

投球時の肘関節外反ストレスと円回内筋・浅指屈筋の関連性
伊藤　衣緒莉，箱﨑　七海　（指導教員：齊藤　誠）

歩きスマホ中の歩容および身体動揺の調査
今村　登吾　（指導教員：山田　南欧美，　齋藤　誠）

運動後の音楽聴収が自律神経機能に与える影響
岩村　雄大　（指導教員：臼井　晴信）

連日の運動負荷による筋疲労に対してダイナミックストレッチングと
スタティックストレッチングの回復効果に違いはあるのか
岡崎　舞，坪井　夕奈　（指導教員：松村　仁実）

足の筋力トレーニングが足部内側縦アーチに及ぼす影響
加藤　志織　（指導教員：濵田　光佑）

地域高齢者における運動習慣と感情特性が転倒に及ぼす影響
川上　緒斗音　（指導教員：加藤　真弓）

片手・両手操作での歩きスマホにおける危険性について
木村　春菜，清水　紅葉　（指導教員：山田　南欧美，木村　菜穂子）

身体活動が睡眠の質に及ぼす影響
工藤　唯加　（指導教員：臼井　晴信）

片脚着地動作時とレイアップシュートの着地動作時，
どちらも knee-in toe-out になるのか.
齊藤　宇紋　（指導教員：齊藤　誠）

緩和ケアでの理学療法士の役割―卒前教育の必要性の検討―
杉浦　舞　（指導教員：加藤　真弓）

運動イメージの違いが非利き手遠投距離に与える影響
曽良　一成，竹橋　尚輝　（指導教員：濵田　光佑）

題名超音波療法とストレッチングを行った際の関節可動域拡大と筋力差の関係について
髙山　朋愛　（指導教員：臼井　晴信）

アクティブ ID ストレッチングで後脛骨筋は伸張されるのか
―超音波画像診断装置を用いて―
遠山　翔太　（指導教員：山田　南欧美，松村　仁実）

肘関節肢位の違いによる肩関節水平外転筋力および筋活動の差
橋本　亜由子　（指導教員：木村　菜穂子）

音とリズムが運動中の心拍数に与える影響について
波多野　琉稀　（指導教員：臼井　晴信）

肩こりに影響を及ぼすストレッサーと痛みとの関連性
牧村　歩乃佳　（指導教員：齊藤　誠）

本学学生のリハビリテーション栄養に対する認識の質的研究
三嶋　蒼生　（指導教員：濵田　光佑）

炭酸浴と蒸しタオルがバランス能力に与える影響
―重心動揺計・関節可動域・Functional Reach Test から―
水谷　和葉，山本　奈々　（指導教員：濵田　光佑）

重錘負荷条件での漸増シャトルウォーキングテストにおける運動強度の違い
宮川　翔哉　（指導教員：宮津　真寿美）

立ち上がり動作時の体幹前傾角度の減少による下肢と体幹の筋活動の変化
森　雅裕　（指導教員：宮津　真寿美）

超音波画像診断装置を用いた後脛骨筋腱伸張量測定方法の確立
山中　皓貴　（指導教員：山田　南欧美）

冷え症と身体活動量，自律神経との関係
山本　千咲　（指導教員：臼井　晴信）

ストレッチングの説明の違いが筋硬度に及ぼす影響
吉川　志音　（指導教員：松村　仁実）

前脛骨筋の筋活動と歩幅の関係性について
太田　侑希　（指導教員：山田　南欧美，濱田　光佑）

地域在住高齢者における思考特性と転倒関連指標との関係について
土井　麻友美　（指導教員：加藤　真弓）

若年者のロコモ度判定と過去の身体活動･食品摂取の関連について
三浦　早喜　（指導教員：加藤　真弓）

≪卒業研究論文　第 13 巻　令和四年度≫

[作業療法学専攻]

COVID-19 によるストレス認知とストレス対処能力の関係
飯盛　拓斗，佐々木　翼　（指導教員：廣渡　洋史）

メタ認知能力と学習観の方略志向との関連について
猪飼　里咲，米村　実菜子　（指導教員：横山　剛）

本学学生のストレス要因とコーピングの関係について
猪飼　里奈　（指導教員：松田　裕美）

アロマオイルの香りが脳血流量に与える影響
上田　眞子，太田　実来　（指導教員：渡邊　豊明）

ポジティブ感情が情報処理に与える影響について―ポジティブ心理学に関する文献検討―
梶原　滉生　（指導教員：松田　裕美）

アロマの香りが人に及ぼす影響と作業療法における活用の可能性
北原　有友実，杉山　実紅　（指導教員：加藤　真夕美）

非利き手での箸操作における，食材ごとのストレス評価と最適な
利き手交換作業療法プログラム要素の検討
小久保　彩香，横井　ひな乃　（指導教員：外倉　由之）

本学学生の進学動機と同一性地位の関連性について
齋藤　真瑚　（指導教員：松田　裕美）

肩周辺の痛みの有訴率と姿勢と肩周辺の痛みの関係について
四十万　青空　（指導教員：渡邊　豊明）

作業療法学生と理学療法学生が精神障害者に対して抱いているイメージの差異
斯波　優心，濱﨑　結衣　（指導教員：清水　一輝）

手指の伸展筋力に関する基礎研究
内藤　陸，中嶋　悠仁　（指導教員：廣渡　洋史）

年長児との製作遊びにおける作業療法学生の困難感から対処行動へのプロセス
長瀬　未来　（指導教員：清水　一輝）

高齢者介護に対する不安・負担と自治体による支援との関わり
古川　愛唯　（指導教員：加藤　真夕美）

作業療法における動物介在療法の効果―過去 10 年の文献より―
水澤　逸都　（指導教員：清水　一輝）

指回し体操が脳に及ぼす影響
水野　天聖　（指導教員：渡邊　豊明）

認知症の BPSD に対する作業療法の効果についての文献検討
諸井　すみれ　（指導教員：加藤　真夕美）

アニマルセラピーの作業療法適応について
小西　望央　（指導教員：渡邊　豊明）

医療従事者を目指す学生の自己受容と基本的信頼感の関係性について
都築　柊初　（指導教員：横山　剛）

愛知医療学院短期大学紀要投稿規定

総則

1. 本誌は愛知医療学院短期大学の学術的進歩に寄与する論文などを掲載する．邦文名は「愛知医療学院短期大学紀要」，英文名は「Bulletin of Aichi Medical College」とする．
2. 本誌は愛知医療学院短期大学の紀要編集委員会が編集する．
3. 投稿原稿の種別は原則として，原著（短報を含む），症例報告，総説とする．ただし，活動報告，調査報告等も論文に準じた形式で投稿できる．なお，専攻科学生および研究生の研究は，論文形式で掲載できる．
4. 投稿は原則として愛知医療学院短期大学の教職員（専任・非常勤等を問わない），専攻科学生，研究生に限る．ただし，それ以外の投稿も紀要編集委員会の判断によって受理できる．
5. 論文形式での投稿原稿は他誌に未発表のものに限る．原著（短報を含む），症例報告，総説の投稿論文の審査は査読制とし，採否は編集委員会において決定する．必要に応じて誓約書・同意書などを貼付する．
6. 掲載された論文等の著作権は，愛知医療学院短期大学に帰属する．

原稿作成の手引き

1. 本文の長さは原著など論文形式での投稿の場合，400 字原稿用紙 20 枚分（8000 字）以内とする（一般的に英文は和文原稿用紙 2 マスに 3 文字となる）．和文原稿は 10.5 ポイント，英文は 12 ポイント，MS 明朝を用いた Microsoft 社の Word で作成し，PDF に変換したものを提出する．
   ＊和文の句点と読点は次に統一する．句点：全角ピリオド（．）読点：全角カンマ（，）．
   ＊英数字は半角とし，フォントは Century で統一する．
2. 和文原稿は, A4 用紙縦置きにして 40 文字×40 行とし, 余白を, 上 35mm, 下 30mm, 左右 25mm とする．英文は，左揃えとし行末のハイフネーションは用いない．
3. 図・表・写真は原則として本文中に組み込む．図・写真の下部（表は上部）には，図 1 などのように番号を記し，スペースを置いて説明をつける．文字・数字は全て本文と同じフォント・サイズにする．
4. 論文原稿は以下の順に記述する．
   ① 和文：題名，著者名，所属，英題名，著者英名の順にそれぞれ改行し，1 行空ける．これらは全て 12 ポイント，本文と同じフォントで太文字とする．筆者名の英名記載は，姓名の順とし間にスペースを入れ，それぞれの 1 文字目を大文字とする．
   ② 英文：英文題名，英文著者名（全員記載），英文所属の順にそれぞれ改行し，1 行空ける．全て 14 ポイントとし，いずれも最初の 1 文字だけ大文字とする
   ③ 要旨は 1 行空けて記述する. 和文は 400 文字以内でキーワードは 5 語以内. 英文は 250words 以内，キーワードは 5 語以内で，全て本文と同じフォント・サイズとする．
   ④ 本文は 1 行空けて以下の順に記述する．（例として以下の言葉を使用する．ただし，内容によっては異なることもある）
      ＊はじめに　＊対象と方法（症例と方法）　＊結果（成績）
      ＊考察　＊おわりに

＊謝辞（科研費等の受理，学術集会等で発表したものはその旨を記載する）

＊文献

いずれも小見出しとして【　】でくくり，和文・英文とも本文と同じポイント，太文字とする．小見出しの前は1行空ける．

5. 略称・略語は最初に出てくる箇所で正式名称を記し，かっこ付けで略称・略語を付記する．
6. 引用文献の記載について
   ① 論文の最後に，引用順および本文に初出の順に番号を付けて記載する．本文中の該当箇所の右肩に数字をつけて表す（例：[1]）．
   ② 著者名は筆頭者から3名まで列記し，それ以上は，ほかまたはet.al.とする．
   ③ 引用雑誌名は略名とし，日本語文献は「医学中央雑誌略名表」，外国文献は「Index Medicus」に従い，以下の文献記載例を参照して記載する．

   ＊文献記載順序

   ・雑誌：著者名，論文タイトル，雑誌略名，巻，初頁-終頁，発行年（西暦）
   ・書籍：著者名，論文タイトル，編集者名，書名，初頁-終頁，発行所，発行地，発行年（西暦）
   ・インターネットにのみ存在する情報（文献）：著者名，Webサイトの名称，URL（アドレス），参照年月日

   ④ 例

   1) 吉田明，岡本高宏，北野博也ほか：甲状腺腫瘍診察ガイドラインに関わって．内分泌甲状腺外会誌28，355-356，2011
   2) Cooper DS, Doherty GM, Haugen BR, et.al.:Revised American Thyroid Association Management Guidelines for Patients with Thyroid Nodules and Differenciated Thyroid Cancer. Thyroid 19 ,1167-1214, 2009
   3) 高見博，村井勝：第1章　内分泌外科総論．村井勝，高見博（編）．内分泌外科標準テキスト第1版，1-7，医学書院，東京，2006
7. 投稿原稿（初校）についてはWordで作成したものを1部プリントアウトし提出する．その際，原稿の著者名と所属を白文字にし，PDF形式で保存したデータも提出する．
8. レフリーによる査読は1回以上とする．
9. 完成論文についてはPDF形式で保存したデータを提出する．その際プリントアウトしたものも1部提出する．
10. 原則として投稿（初校）は毎年度8月1日～12月末を受付期間とする．
11. 本誌は原則として毎年度4月に配布する．
12. この規定は2014年4月1日より発効とする．

追記1；この規定は2015年8月1日に改定し，改めて同日発効とする．
追記2；この規定は2016年8月1日に改定し，改めて同日発効とする．
追記3；この規定は2017年8月1日に改定し，改めて同日発効とする．
追記4；この規定は2018年8月1日に改定し，改めて同日発効とする．
追記5；この規定は2020年8月1日に改訂し，改めて同日発効とする．

編集後記

愛知医療学院短期大学紀要 第 14 号に、原著論文 3 編、短報 1 編、活動報告 1 編、合計 5 編を掲載し、皆様のお手元にお届けすることができました。

新型コロナウイルス感染による制限もようやく緩和の兆しが見え始めているとはいえ、大変お忙しい中での論文の作成に携われた先生方、論文の査読に携われた先生方に厚く御礼申し上げます。また、本紀要の編集に携わっていただいた FD＆SD 委員会の紀要編集担当の諸氏に御礼申し上げます。

リハビリテーションや教育について変革を進めていくその時に、来年度は節目の第 15 号の発行となります。これまでの取り組みを振り返り、新しい時代に向けた取り組みを始めていく時だと思います。学外からもご指導ご鞭撻をいただき、本紀要が、益々リハビリテーション、セラピストの養成教育などに寄与できますよう祈念しております。

色々とご迷惑をおかけすることをあるかもしれませんが、今後とも何卒よろしくお願いいたします。

紀要編集委員長
横山　剛

〈紀要編集委員〉

編集委員長

横山　剛　（リハビリテーション学科作業療法学専攻）

編集委員

齊藤　誠　（リハビリテーション学科理学療法学専攻）

齊藤　寛子（統括管理部）

愛知医療学院短期大学紀要

第 14 号

発行日　令和 5 年 3 月 31 日

発行者　学校法人　佑愛学園

愛知医療学院短期大学

〒452-0931　愛知県清須市一場 519

TEL : 052-409-3311

大学 HP : https://www.yuai.ac.jp/

編集者　愛知医療学院短期大学紀要編集委員会

印刷所　有限会社フレアクション